

IPSS Discussion Paper Series

(No.2020-J01)

「人間関係の希薄さに関する研究のレビュー：
社会的孤立，孤独，SNS に注目して」

小田中 悠（慶應義塾大学）
牛腸 政孝（慶應義塾大学）
山下 智弘（慶應義塾大学）
吉川 侑輝（慶應義塾大学）
鳥越 信吾（十文字学園女子大学）

2020年7月



〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3
日比谷国際ビル 6F

本ディスカッション・ペーパー・シリーズ
の各論文の内容は全て執筆者の個人的見解
であり、国立社会保障・人口問題研究所の
見解を示すものではありません。

人間関係の希薄さに関する研究のレビュー： 社会的孤立，孤独，SNS に注目して

小田中 悠*・牛腸 政孝*・山下 智弘*・吉川 侑輝*・鳥越 信吾*

* 国立社会保障・人口問題研究所 臨時研究補助員，慶應義塾大学

[要旨]

日本社会における人間関係の希薄さが社会問題として取り上げられるようになって久しい。そこで、本稿では、そのような問題について扱った研究をサーベイし、人間関係の希薄さはいかなる概念・尺度によって捉えられるのか、他者との繋がりや弱さを生じさせる要因は何か、その状態はどのような困難を引き起こすのか、という問いに答えることを目指した。その結果、まず、人間関係の希薄さを捉える概念として、その客観的な側面を捉える社会的孤立と、主観的な感情に焦点を当てた孤独という 2 つの概念に注目すべきであることが分かった。ついで、それぞれを主題とした研究を概観し、以下のことを明らかにした。第 1 に、社会的孤立の要因としては世帯構成や集団への参加等が、孤独の要因としては文化・規範といった社会的なものが考えられている。第 2 に、社会的孤立と孤独はともにメンタルヘル스에悪影響を及ぼすとされている。その上で、現在用いられている主要な尺度を複数紹介した。最後に、現代において人間関係を維持・構築するための重要なツールであるインターネットや SNS と社会的孤立・孤独の関連を扱った研究を取り上げた。ここでは、インターネットや SNS が社会的孤立・孤独を緩和するような効果を持つことが確認されている一方で、調査方法や尺度については、人々が利用するサービス自体が流動的なものであるため、逐次検討していく必要があることが分かった。

1 はじめに¹⁾

1.1 はじめに

現代日本の人間関係の在り方を表す言葉として、NHK (2010) により放送された番組をきっかけに、「無縁社会」という用語が用いられるようになって久しい (e.g. 橋木 2011)。現在においてもなお、人々の関係性が希薄であるということは、たとえば、保健・医療・福祉といった観点から取り組むべき社会問題の一つとなっていると言えるだろう。そして、それは世代を問わずに生じている問題であろう。高齢者の「孤独死／孤立死」はもちろん、若者についても、「ニート」や「引きこもり」といった概念とともに人間関係の希薄さが問題視されている (e.g. 内閣府 2017)。

では、人々が陥ってしまっているであろう、そのような状態は、いかなる概念によって把握し、いかなる尺度を用いて測定する必要があるのだろうか。また、そのような状態におかれてしまう原因や、それによって引き起こされてしまう困難には、いかなるものがあると考えられているのだろうか。

本稿では、そのような問題意識のもと、社会的孤立 (social isolation)、あるいは、孤独 (loneliness) と呼ばれている現象を扱った主要な研究を概観した上で、社会学の観点から、人間関係の希薄さを捉える理論的な枠組みを提案することを目指す。

本節では、蓄積された先行研究を概観するに先立って、本稿全体のフレームワークを提案していく。そのために、まず、およそ1世紀前に自殺という現象と人間関係のあり方を結びつけた考察を行なった、E. Durkheim の『自殺論』を紹介する。そして、ここでは曖昧なものとなっていた人間関係の希薄さを捉えるための概念として、「独存 (aloneness)」、「社会的孤立 (social isolation)」、「孤独 (loneliness)」という3つの概念を用いるという方向性が示される。すなわち、独存はもっとも素朴に「ひとりであること」を表す概念であり、その下位類型として、客観的な側面に焦点を当てた概念が社会的孤立、他方で、主観的な側面に焦点を当てた概念が孤独である。

そして、社会的孤立や孤独といった概念が用いられはじめた頃の研究に目を通すことで、他者との関わりの希薄さを捉えるためには社会的孤立だけでも、孤独だけでもなく、その双方に目を向ける必要があることが示される。

2 節と3 節では、社会的孤立と孤独のそれぞれに関する研究のレビューがなされる。ここでは、それぞれ、社会的孤立と孤独の測定について、そして、何が社会的孤立／孤独の要因となっているのか、あるいは、社会的孤立／孤独が何の要因となっているのかといった観点から各領域における主要な論点が検討される。

4 節では、人間関係の構築・維持のための新しいツールである SNS に注目した、社会的

孤立／孤独を扱った研究についての紹介がなされる。そこでは、インターネットや SNS の利用と社会的孤立／孤独を結びつけて考えていくための方針が整理される。

最後に、5 節では、4 節までのレビューを手がかりに、社会的孤立・孤独の双方を捉えるための理論的な枠組みについての考察を行う。その際、本節でも取り上げる Durkheim や、その影響下でなされた R. K. Merton の議論を下敷きにした理論の構築可能性が提案される。

1.2 萌芽としての『自殺論』

人間関係の希薄さと保健・医療・福祉的な困難との結びつきについて論じた研究は、社会学の創始者の一人とされる、Durkheim の『自殺論』に遡ることができると考えられている (e.g. Townsend 1957: 5; House et al. 1988: 540, 543; 齊藤 2018: 38-9)。彼の問題関心は、自殺という現象を説明するに際して、心理学的な要因やライフコースといった個人的な要因だけでなく、社会的な要因が及ぼす影響を捉えることにあった。そして、よく知られている 3 つの類型、すなわち、自己本位的自殺、集団本位的自殺、アノミー的自殺という類型を提出したのである。ここでは、特に本稿の関心と重なるところがあると思われる、『自殺論』第 2 篇第 2 章・3 章の自己本位的自殺について、簡単に紹介しておこう。

Durkheim が自己本位的自殺について論じている箇所注目しているのは、宗教や世帯構成等と自殺率の関係である。彼によれば、宗教の教義の違い(カトリック／プロテスタント)や世帯構成の違い(既婚／未婚／配偶者との離死別した者)は、人々の統合の強さに関わっており、その統合が強いほど、自殺は抑止されるという。たとえば、世帯構成と自殺との関係について、家族の人数が少ないほど、とりわけ、未婚者や配偶者と離死別している者であると、自殺する可能性が高いことが指摘されている。

そして、統合の強さと自殺の発生・抑止のあいだのメカニズムについては、次のように論じてられている。まず、統合が弱くなると、各人が社会的自我よりも、個人的自我を優先するようになる、すなわち、人々は自己本位な状態となる。それによって、自らの判断で自分の命を断つことへの躊躇いが薄れる。また、「社会から切り離されていると感じれば感じるほどそれだけ、その社会を根拠にも目的にもしている生からも切り離されていくことになる」(Durkheim 1897=1985: 248)。それゆえ、社会的な統合が弱まると、自殺が増加するというのである。

以上のように、Durkheim の『自殺論』は、保健・医療・福祉的な問題と人間関係のあり方の関わりを論じた研究の萌芽としてみることができる。そこでは、人間関係を社会的な統合の強弱という観点から捉えることで、何が人間関係を希薄なものとするのか(宗教、世帯構成)、そして、人間関係が希薄なものとなるといかなる困難が生じるのか(自殺)という問いに答えるような議論であるとみなすことができるだろう。

そして、本稿では、そのような枠組みは、現在に至るまで継続しているという立場をとり、次節以降でこれまでの研究の議論を検討していくこととする。それに先立って、以下では、ここまで、「人間関係の希薄さ」、あるいは、「社会統合の弱さ」と呼んできた事態をより詳細に捉えるための諸概念を紹介し、それらのあいだの連関がどのように捉えられてきたのかを検討していく。

1.3 独存・社会的孤立・孤独

本稿では、Durkheim が社会統合の弱さという仕方で捉えようとした事態を捉える概念として、Tunstall (1968=1978) が提案した3つの概念を用いることとする。すなわち、独存、社会的孤立、孤独である (Tunstall 1968=1978: 53-7)²⁾。まず、独存とは、ひとりである状態を表すための用語である。Durkheim の議論に則していえば、社会統合の弱さが生じているという状態であるといえるだろう。そして、そのような事態をより精密に捉えるための概念が社会的孤立と孤独の2つである。

社会的孤立は、近隣に住む人、友人、親族、同僚といった、一般に身近な人として想起されるような人々との接触頻度が少ない状態を指している。このような概念を用いることによって、たとえば、独居をしているという点では独存状態にあるとは言えるものの、近隣住民とは頻繁に交流を持っているような人は社会的孤立という状態には該当しない、というように、細やかに対象者が置かれている状況を捉えることができるようになる。

そして、孤独は、寂しさや心細さといった情緒的な感情を抱いている状態を指す概念である。これもまた、独存状態を精緻に捉えることを可能にするものである。たとえば、社会的に孤立しているけれども、その状況においてもネガティブな感情を抱いていないような人は、社会的孤立状態にあるとはいえるけれども孤独ではなく、逆に、他者との接触は頻繁になされていても、そこでの人間関係に満足はしておらず、寂しさを抱いているような人は、社会的孤立ではないが孤独であるというように論じることが可能となる。

以上のように、Tunstall は、人間関係が希薄であるという事態を、まず、独存という語を用いて広く捉えることを試みている。そして、さらにその客観的な側面を捉えるための社会的孤立、そして、主観的な側面を捉えるための孤独という二つの概念を提起することで、ひとりであることという状態を多角的に捉えることを可能にしたのである。そして、Tunstall はイギリスにおける高齢者の生活実態を調査する中で、それぞれの状態におかれている人々の傾向を分析している。

このように、独存という状態は多面的なものである。そして、独存を捉えようとするとき、たとえば、社会的孤立だけ、あるいは、孤独だけに注目するといった方針が考えられる。そして、2節や3節においてレビューされるような研究の多くにおいては、そのような方針が

取られてきたといえるだろう。

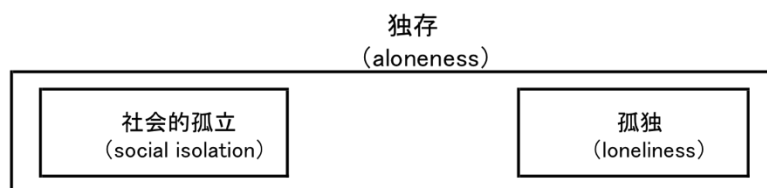


図 1-1 独存・社会的孤立・孤独

しかしながら、その多面的な様子を理解し、ひとりでいることが、たとえば、心身の健康に及ぼす影響をより精緻に捉えていくためには、社会的孤立と孤独の双方を視野に入れ、その連関を問うていくことが必要だと考えられる。以下では、そのような方針が、社会的孤立研究の端緒とされる、Townsend の研究、そして、初期の孤独研究のうちに既に存在していたことを示していく。

1.4 Townsend による社会的孤立研究

ここでは、社会的孤立研究の端緒とされている、Townsend (1957, 1963=1974) による研究を概観していく²⁾。彼の研究は、本稿においても 2 節において改めて取り上げるように、社会的孤立の研究を切り開いたものとして扱われており、上述した Tunstall の研究も Townsend の影響下でなされたものである。

Townsend の研究は、1950 年代前半に、ロンドンのイーストエンドと呼ばれる、白人貧困層や移民が多いエリアにて行われた調査を元にしたものである。そこでは、主として高齢者の生活実態に関心が寄せられており、家族や親族とつながりを持たない高齢者の実態を探ることが目的となっている。すなわち、未婚、離死別、子供なし、同居家族なし、近所に親族がいないなどの理由により、ケアの担い手となりうる人が身近にいない高齢者の特徴を探ることにある。

そして、そのために測定される事項は、どのくらいの頻度で親族や家族に会うのか、近所に住んでいるか、日々の生活や緊急事態に助けてもらえるかなどといったことである。また、次のようなことが考察の対象とされている。すなわち、高齢男性と高齢女性の役割の違い、それらは寡婦／寡夫・子供なし・独身などの人にとってどういう意味を持つのか、どういった高齢者にソーシャルサービスの需要があるのかといった問いに答えるための研究となっている。

ここでの議論と関わりの深い箇所は、13 章（「孤立、孤独、生命力」）と 14 章（「誰が国

家によるケアを求めるのか) であると考えられるため、以下では、この2つの章の内容を取り上げる。13章では、まず、頼れる人を持たない高齢者の状態を捉えるための概念についての検討がなされる。そこでは、まず、loneliness や social isolation という概念を厳密に定義することができるかが問題となっている。そして、彼は、社会的孤立を「家族やコミュニティとわずかな接触しか持たないこと」、孤独を「交流の欠除あるいは喪失に関する好ましくない感じ」というように定義し、社会的孤立を客観的な、孤独を主観的なものとする (Townsend 1957: 166, 1963=1974: 227)。先に述べた Tunstall の定義の由来はこれである。

そして、Townsend は、社会的孤立を測定するために、独自の尺度を提案している。その詳細は後の節に譲るが、基本的なアイデアは、その定義にもあるように、親族や近所の人との接触頻度や外出の回数を測定することにある。その結果、社会的孤立の度合いが高い、すなわち、接触頻度等が低い人たちの特徴として、次のようなものが挙げられている (Townsend 1957: 169-72, 1963=1974: 231-5)。すなわち、パートナーがいない、病弱、そして、退職しているなどである。また、パートナーと離別・死別した女性であっても、その娘とのあいだには関係が保たれる。というのも、その娘が未婚である場合には同居しており、既婚であったとしても近所に住んでいることが多いからである。逆に、息子の場合はロンドンから離れてしまうため、接触頻度が下がってしまうという。

そして、Townsend は、続く14章において、世帯構造と医療や福祉のニーズとの関連についても分析を行なっている。そして、病院での調査を行った結果、単身者、寡婦/寡夫、とりわけ、娘がいない、あるいは、子供と地理的に遠いところで暮らしているような高齢者は入院のリスクが高いことを示している。また、福祉施設やホームヘルパーの利用についても、同様の傾向、つまり、社会的孤立に陥りやすいような特徴を持つ人にニーズがあることを示している⁴⁾。

以上のように、Townsend の研究は、社会的孤立と孤独を区別するという独存状態を捉えるための概念上の整理を行ない、何が社会的孤立を引き起こしているのか、そして、社会的孤立と関係が深い世帯構造の違いが何を引き起こしているのかを示した画期的なものだといえる。そこでは、パートナーの有無や子供の性別が社会的孤立の要因として重要であることが示唆され、そして、現在婚姻状態にある者と同居していないことなどが医療・福祉のニーズを高める要因となることが示されている。

他方で、Townsend は、自らが社会的孤立から区別した、孤独についても調査を行なっている。そこでは、社会的孤立と孤独との関係にとりわけ焦点が当てられており、その結果、社会的孤立の状態にある人が必ずしも孤独ではないということが示されている。すなわち、社会的孤立の状態にあっても、孤独ではない人がいるということを明らかにしている。そして、孤独に陥ってしまう要因として重要なものとして、惜別 (desolate)、すなわち、近親者

など、身近な人との離別・死別を経験することを挙げている。また、孤独は社会的孤立とあわせて、医療福祉ニーズを高める因子として考えられてもいる (Townsend 1957: 206, 1963=1974: 278)。

このように、Townsend は、本稿の用語で言えば、独存状態にある高齢者の実態を探るために社会的孤立と孤独の双方を調査し、それぞれの性質を浮き彫りにするために、両者の関係を探っている。その要点を、誤解を恐れずに図式化するならば、図 1-2 のようになるだろう。

しかし、Townsend による孤独の調査は (のちの Tunstall にも引き継がれているが)、調査対象者に孤独を感じるかどうかを尋ねるといった仕方ではなされたものである。これは、後の節で見るように問題含みの方法であり、社会的孤立の尺度の設計思想が現在にも引き継がれているのに比べて、プリミティブなものとして評価せざるを得ないであろう。

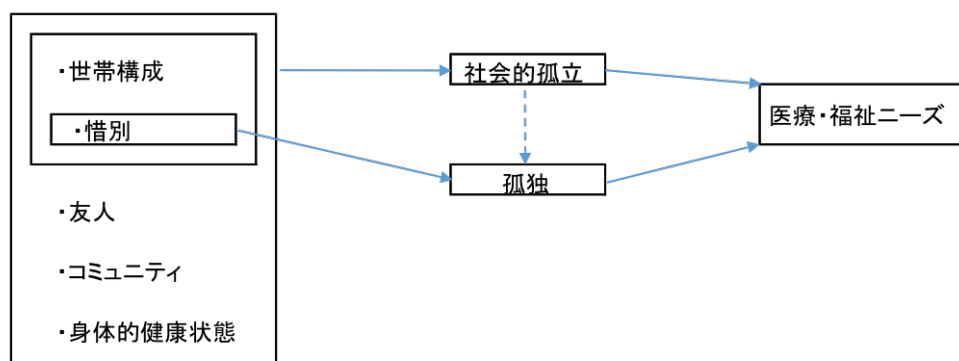


図 1-2 Townsend の議論

では、孤独はどのようなものとして扱われてきたのであろうか。以下では、孤独についての初期の研究において、孤独が、そして、それと社会的孤立との関係がどのように論じられていたのかを見ていく。

1.5 孤独研究

ここでは、D. Perlman と L. A. Peplau によって、1984 年に執筆された、孤独に関する文献のレビューに基づき、初期の孤独研究について概観する。著者の 1 人である Peplau は、現在に至るまで広く用いられている、UCLA 孤独尺度を考案したグループのメンバーでもあり、この論文では 1960 年代からアメリカにおいて行われていた孤独研究が紹介される。

Perlman と Peplau は、孤独を当時のアメリカのメンタルヘルスにおける問題として捉えた上で、「ある人の社会関係というネットワークが、質／量において欠乏している時に引き

起こされる、不快な経験」と定義している (Perlman & Peplau 1984: 15). この時、(上述した Townsend の分類は参照されてはいないもののそれと同様に,) 孤独は主観的な経験であり、客観的な社会的孤立とは異なることが強調されている (Perlman & Peplau 1984: 15-6).

そして、孤独研究の関心は、孤独の原因、そして、孤独になるリスクが高いグループを明らかにすることに向けられているとする。孤独へと至る過程としては、次のような理論的なモデルが想定されている (図 1-3). すなわち、〈所与の要因 (個人の性格, 周囲に仲間になってくれそうな人がいないといった状況, 文化的価値や規範)〉 → 〈求められる/必要とされる社会関係 + 実際の社会関係〉 + 〈突発的イベント (死別, 引っ越し, Townsend でいう惜別)〉 → 〈願望と現実のミスマッチ + 認知/態度〉 → 〈孤独の経験〉 というモデルである。そして、どのような人が孤独になりやすいかといった観点から、人口学的な特性や社会経済的な要因などと、孤独との関係が議論されている。

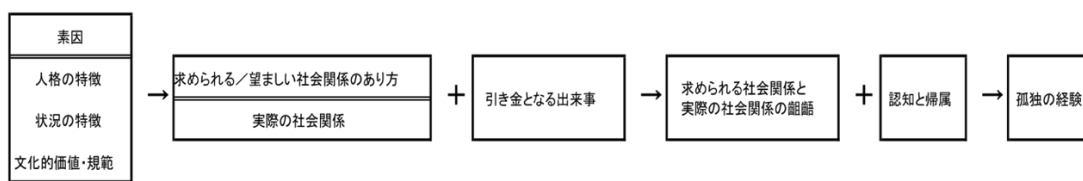


図 1-3 Perlman & Peplau (1984) の孤独モデル (p22 より作成)

本稿にとって、重要なのは、孤独の要因として、初期の段階から、社会関係が重視されていることである。とりわけ、重要なものとして議論されているのが、孤独・ソーシャルサポート・ソーシャルネットワークの関係である (Perlman & Peplau 1984: 17-9). 孤独とソーシャルサポートはともにメンタルヘルスに影響を与えるものである。そして、メンタルヘルスへの影響という点では、未既婚・離婚というソーシャルネットワークも重要である。

したがって、Perlman と Peplau は、3つの観点を統合的に考えていく必要があるという。この時、孤独は主観的であるが、ソーシャルサポートは主観・客観の双方の面があり、また、客観的な視点であるソーシャルネットワークについては、孤独研究者はそれを看過しているといった旨の指摘がなされている。そして、具体的には、孤独とソーシャルサポートを受けることとの関係、どのような社会関係の欠落がメンタルヘルスに対して重要か、どのような客観的なネットワークが孤独やサポートに影響があるか、社会関係における、どのような特徴がメンタルヘルスに影響があるか、といった4つの問いへ取り組むべきだと主張されている。

以上のように、孤独研究は、初期の段階において、UCLA 孤独尺度のような尺度を作成し、

メンタルヘルスに関する独自の研究領域として確立したものである。他方で、Townsend であれば、社会的孤立と呼ぶような事態にも目を向けつつ、メンタルヘルスへの影響という観点から、両者を統合して考える必要性が、早い段階から指摘されてもいることが、Perlman と Peplau によるレビューから伺い知ることができるだろう。

1.6 社会的孤立と孤独の双方を視野に入れた研究へ

ここまで見てきたように、独存、つまり、社会関係が希薄な生活を送ることについて、その主観的な側面である孤独、客観的な側面である社会的孤立というそれぞれの水準で議論がされてきた。そして、社会的孤立研究は Townsend がそうであったように、高齢者を対象とした社会学的な研究から出発し、孤独の研究はメンタルヘルスや心理学といったように、それぞれ、重なり合いはするものの、異なる領域の中で議論が始まったと言えるだろう。しかし、古典的な研究において指摘されていたように、独存状態がもたらす負の影響を解明するためには、両者それぞれの作用機序や、両者の関係を問うていく必要があることは疑う余地がないであろう。

以下、本稿では、独存という状態を捉えるためには、社会的孤立と孤独の双方に目を向ける必要があるという立場をとり、それぞれの研究を概観していく。

[注]

1) 本稿は、執筆者全員で文献の収集・整理と各節の内容についての議論を行った上で、1 節を小田中、2 節を牛腸、3 節を山下、4 節を吉川、5 節を小田中が担当執筆している。本稿の対象となった文献の検討は、次の手順で作成された 2 つのリストをもとに行われた。まず Google Scholar において「Social Isolation」で検索（2019 年 3 月 8 日時点）を行い、「Any time & Sort by Relevance」でソートのうえで機械的に 75 件をリスト化した（リスト①）。続けて、リスト①にふくまれていた 5 つのレビュー論文（Wenger, et al. 1996; Cattan, et al. 2005; Dickens, et al. 2011; Holt-Lunstad, et al. 2015; Courtin & Knapp 2017）のうち、2010 年代以降に執筆された 3 つ（Dickens, et al. 2011; Holt-Lunstad, et al. 2015; Courtin & Knapp 2017）を対象として、レビュー中において参照されている「社会的孤立（Social Isolation）」関係論文 35 件をすべて列挙した（リスト②）。執筆に際しては、これらの 2 リストをもとに以下の通り文献の再選定を行った。第 2 節の社会的孤立に関する文献の検討では、社会学的な観点からの検討という本稿の目的にしたがって、孤立研究のなかでしばしば古典として扱われる Townsend（1957）や Tunstall（1966）、孤立尺度の検討において重要であると思われる Cohen（1991）や Lubben et al.（2006）、またこうした尺度に関する批判的検討をおこなっている日本での先行研究として河合（2009 など）齊藤（2012 など）の追加を中心に、取捨選択をおこなった。

第3節における孤独研究の researched に際しては、主要な孤独尺度3種の元論文、現時点で最新の概説である de Jong Gierveld et al. (2018)、および同論文において言及されている論文を調査対象に加えた。第4節における SNS 関連の社会的孤立／孤独研究の検討作業に際しては、文献リストを一から構築したうえで、検討を行った。これは、前述のリスト①と②のいずれにも、SNS 関連の文献が1件のみ (Sanders et al. 2000) しか含まれていなかったからである。第4節におけるリスト作成の具体的な方法については、4.1の最後に記した。

なお、引用や文献の表記については、原則として日本社会学会が発行している『社会学評論スタイルガイド』 (<https://jss-sociology.org/bulletin/guide/>) に準じている。

2) 訳書では、aleness には孤独、loneliness には孤独不安という訳語が当てられている。しかし、現在、loneliness は孤独と訳されることが多いことから、そちらに孤独を当て、aleness には単にひとりであることを表す独存という語を当てた。また、Tunstall はこの他にも独居 (living alone)、アノミーという類型を提案しているが、議論が細分化し、全容の把握が困難になることを防ぐためここでは取り上げない。

3) ここでは Townsend の著書として2つの文献を挙げているが、いずれも同名のものである。ただし、1957年の初版と63年の版とでは、全体の構成に変化はないものの細かい点で差異があることに注意が必要である。以下では、63年版が入手できなかったため、基本的に57年版を参照し、もし該当する箇所が63年版の訳書にある場合には、そのページも記載している。

4) この章での Townsend の議論で注意しなければならないのは、世帯構造と入院やサービス利用の関係を見るクロス表は作成しているものの、前章において尺度を提案し測定した社会的孤立得点と医療・福祉ニーズの関係については定量的な分析が明示的にはなされていないことである。しかし、本節図 1-2 では、議論の要点を明確にするため、近似的に社会的孤立が医療・福祉ニーズと関係しているとみなすことができると考えている。

2 孤立研究について

「社会的孤立」の研究は近年増加傾向を示している。斉藤雅茂によると、「高齢者」と「社会的孤立」をともに内容に含む英語論文数は、1980年代が264件であったのに対し、2000年代には605件と2倍以上に増加している¹⁾ (斉藤 2012: 56)。

「社会的孤立」の研究は、社会問題として広く知られる「孤独死」の問題そのものとの関係においてだけではなく、孤立しながらも今現在生活する者の身体的・精神的健康に対しても負の影響をもちうるものとしても注目されてきた。たとえば、社会的孤立の経験は、統合失調症や躁鬱病の要因となるとする研究 (Kohn et al. 1955) や脳卒中のリスクとの関連での研究 (Boden-Albala 2005) がなされてきた。その他には高齢者の認知機能 (Shankar et al. 2013)、健康行動への影響 (Tomoka et al. 2006; Shankar et al. 2011)、睡眠 (Cacciopo & Cacciopo 2014)、心臓病のリスク (Knox & Uvnäs-Moberg 1988)、死亡率 (Steptoe et al 2013; Tanskanen & Anttila 2016) などと、社会的孤立との相関性がそれぞれにおいて示されている。これらに見られるように、「社会的孤立」は、社会福祉の領域だけでなく、神経生理学、社会学などの分野を含みながら学際的なかたちで多くの分野にわたり議論されており、その定義も多様なものとなっている。まずは現在に至るまで「社会的孤立」研究において広く参照されつづけている古典での議論を確認していくことから始めよう。

2.1 社会的孤立研究の古典としての P. Townsend 『居宅老人と親族網』

社会的孤立に関する古典としてよく知られるのは、Townsend による『居宅老人と親族網』である。Townsend は「社会的孤立」を「孤独」から分け、前者を客観的な尺度と関連して測定可能なものとし、後者を同一現象の主観的な感情的側面として切り分けるということをおこなっている。Townsend による定義はそれぞれ次のような仕方でなされている。それによれば「社会的孤立」とは「家族やコミュニティとほとんど接触がないこと」、「孤立」とは「仲間づきあいの欠除あるいは喪失による好ましからざる感じ」をそれぞれ指す (Townsend [1957]1963=1974: 227)。

「社会的孤立」と「孤独」とを分けていく方針は、なにより、孤立している人が必ずしも孤独であると述べているわけではないという事実 (Townsend [1957]1963=1974: 235) によって支持されるものだが、まずはこの区別自体をより十全に理解するために、Townsend によるそれぞれの定義を確認しておこう。

Townsend によれば、「社会的孤立」は次のような仕方で、孤立していない人びとと区別される。すなわち「孤立化した人びとを規定する方法は、社会的接触の数によって、面接した人びとを尺度の上に位置づけてみること」(Townsend [1957]1963=1974: 248) である。このう

ち実際に Townsend が「孤立化した人」として数え入れるのは、「1 週間のうちに 21 回以下の接触」または「1 日につき 3 またはそれ以下」の接触しかもたない人びとである。

このように、客観的な孤立とは、他者との接触の回数によって、孤立しているかそうでないかが測られるという議論になっている。この「接触」(contact)とは、2 人の人間が「偶然に挨拶を交わし合うという以上の含み」をもった「通常の決まっている、あるいは習慣的になっている家庭や家庭外でのもうひとりの人間との出会いを意味」している。とりわけ Townsend が注目したのは、親族、隣人や友人、地区の看護師や医療関係者、ホームヘルパーとの接触である。そうした人びととの一週間あたりの接触の回数を合計して得点づけ、そのほかには、毎週クラブや映画、教会に行くこと、フルタイム、パートタイムの仕事などをはじめとした、他者と関わり合う機会に対して、傾斜づけられた配点加えられている(表 2-1)。

○ひとりで生活している未亡人

質問項目	週あたり社会的接触数
ひとりの既婚のむすめと、夫を亡くしたひとりのむすめに毎日会う	14
2人の孫たちと毎日会う	14
むすこと週に1回会う	1
妹と週1回会う	1
2人の既婚のむすこと、彼らの妻および3人の子どもたちに週1回会う	7
弟およびその妻と2週間ごとに会う (1/2+1/2)	1
12人の他の親族の人たちと年1~6回会う	1
学校掃除人としてのパート・タイムの仕事	10
老人クラブを週1回訪問	2
隣人を週2回相互に訪問	2
不規則な社会的活動	1
総得点	54

表 2-1 Townsend の質問項目の例 (Townsend ([1957] 1963=1974: 228) から作成)

他方で主観的なものとされる「孤独」については、Townsend は同一対象に対する面接のなかで、彼らが孤独を感じているかどうか、孤独を感じたことがあるかどうかを尋ねるといふ仕方で検討をおこなっている。「彼らがどの程度孤独感を経験しているか」という観点で聞き取りをおこなった結果、「孤立した人」および「いずれかといえば孤立している人」の約半数が「孤独ではない」と答えるということが示された (Townsend [1957] 1963=1974: 236)。

この結果をどのように捉えることができるか。Townsend は「孤独」の要因としてどのようなものが考えられるのかを、こうした人びとの特徴から抽出することを試みる。それによれば「孤独である」と答えたのは「配偶者を亡くした人」の 46%、「ひとりで住んでいる人」の 42%、「70 代と 80 代後半の人」の 53%、「病弱である人」の 43%であった (Townsend

[1957]1963=1974: 237).

「孤独」の要因が多様に考えられるなか、Townsend が強く注目を寄せるのが「夫あるいは妻、子どもといった近親の仲間を死亡や病気、あるいは転移によって最近失った」経験である。あるいは「自分たちが愛していただけかとの交わりを最近うばわれた」経験が「孤独」の経験を説明するとも述べられる (Townsend [1957]1963=1974)。

「孤独」に関する詳細な議論は次節にゆずるとして、この結果は、「社会的孤立」に対してどのような含意をもちうるだろうか。配偶者や子ども、親しい人びとといった重要な他者の喪失や別離が人びとの「孤独」に対して影響を与えるという仮説は、たとえば Townsend 自身が挙げる「接触の機能、強さ、持続」(Townsend [1957]1963=1974) という論点——Townsend はそれらを具体的には説明していないが、接触の数や頻度をはじめとした量的なもの対比されるような接触の質的要素であると言えよう——と照らし合わせて考えてみた場合、どのような他者との、どのような「接触」の喪失や欠如が、「孤立」の状態をより十全に説明しうるのかという問いを浮かび上がらせるものと思われる。

「社会的孤立」の状態を「重要な他者」によって説明しうる形態の議論としてはどのようなものが考案されてきたのか。それについては、例えば、Marsden (1987) や McPherson ら (2006) による「コア・ディスカッション・ネットワーク」(core discussion network) が挙げられるだろう (McPherson & Smith-Lovin 2006)。重要な対人関係を分析するために開発されたコア・ディスカッション・ネットワークは、「この半年以内に重要な事柄について話した他者は誰か」などを尋ねることで、その回答者を中心にしたネットワークを辿りなおすことを試みる。その際に、名前の挙げた人物の性別、年齢や関係性(兄弟なのか、どのような活動をとともにしているのか等々)など、その人物にあてはまる情報を抽出していく。こうした方法によって、回答者にとって親しい関係にある重要な他者がどのような人物であるのか、その関係性の強さなどをある程度捕捉することが可能になる。さらにコア・ディスカッション・ネットワークの利点として、「重要な事柄について話せる他者」の人数を数値化しておくことができるため、数年間でのネットワーク・サイズの変化を捉え、回答者たちが挙げる平均人数の変化によって「社会的孤立」度合いの変化を把握することが可能になるといふことが挙げられるだろう²⁾。

基本的な「社会的孤立」の考え方にあるのは、測定の対象となる人物の社会的な「接触」の数や頻度である。ただし Townsend がその「接触の機能・強さ・持続」へ注意を向けさせ、McPherson らが「重要な他者」に重要性を置いていたように、そうした「接触」が対象の人物にとってどのようなものであるのかということについて探究することも、「孤立」を測定するために必要であるように思われる。そこで次に我々が見るのは、これまで「社会的孤立」を測定するために考案されてきた尺度についてである。

2.2 社会的孤立についての尺度

どのような尺度が「社会的孤立」を測定するために考案されてきたのか。Nancy らによれば、社会的孤立について、現在よく用いられるのは、Lubben Social Network Scale であるという (Nancy et al. 2019)。そこで本節では、まずは、この Lubben Social Network Scale と、それと関係の深い Berkman-Syme Social Network Index、Cohen の Social Network Index をとりあげる。この3つの尺度の関係は、Berkman-Syme Social Network Index をもとに、Lubben Social Network Scale と Social Network Index のそれぞれが発展・改良という目的のもとに開発されてきたとされるものであるとされる (Cohen 1991; 栗本ほか 2011)。

まず Berkman-Syme Social Network Index である。これは、社会的孤立と統合をはかるための尺度として 1979 年に提示された尺度である。ここでは「婚姻関係やパートナーシップ」「友人や家族との接触頻度」「宗教活動への参加頻度」「集団でのメンバーシップ」という4領域に焦点を当てて、社会的孤立を測定するというものである。これら4領域での質問項目の得点の合計如何でその人物が社会的に孤立しているかどうかを判定するものとなっている (Ford et al. 2006)。

具体的に Berkman-Syme Social Network Index では、「親と生活しているかどうか」「親密さを感じられる親類は何人いるか」「2週間のうちで一度以上会ったり話したりする親しい友人は何人いるか」「教会や寺院あるいは宗教的なグループに所属しているかどうか」「ボランティア活動に参加しているか」などの質問項目が挙げられている。

Berkman-Syme Social Network Index が上記の4つの領域での統合の度合いと孤立を測定するものであるとすれば、社会統合を社会的役割の数として概念化し、その役割の数とそれら役割をとりまく関係性の数を算定することを尺度にとり入れることを求めたのが Cohen の Social Network Index である (Cohen 1991)。Cohen は Berkman-Syme Social Network Index に不足している観点として、個人のもつアイデンティティの側面に注目したわけである。この時、Cohen は、社会的孤立を個人のアイデンティティの少なさとして見る Thoits の議論に依拠している。この議論は、「社会的孤立」をなんらかの集団との関係をもっているかどうかという点だけでなく、そのなかでの相互的な役割関係やそれによって支えられる自己のアイデンティティとの関係においても捉える視点を与えるものとなっている (Thoits 1983)。

こうした背景のもと、Cohen の Social Network Index では、Berkman-Syme Social Network Index での質問項目に、複数回答可能なかたちで、メンバーと2週間に1回以上話し合うようなグループについて、その「グループの名前あるいは種類と、そのグループの中で2週間に1回以上話す人の総数」という、回答者の社会的な位置に関する事項が加わる仕方で拡張がなされている。

Cohen による Social Network Index だけでなく、Lubben Social Network Scale もまた、

Berkman-Syme Social Network Index をもとに考案された尺度である (Lubben et al. 2006). Berkman-Syme 版との大きな違いは, Lubben Social Network Scale が, 社会的孤立一般に対する尺度ではなく, 「高齢者」の社会的孤立を測るために開発されたものであるということ, 高齢者のネットワークで重要と考えられる家族・友人関係の質を詳細に測定できるよう改良が目指されていたという点に求められる (栗本ら 2011). つまり, 主な特徴として, 「高齢者」の社会的孤立のための指標であるということ, それに伴い 4 つの領域から「家族」「友人」の 2 項目へと, その質問の焦点が集中しているという点が挙げられる.

そのため次のような質問項目が Lubben Social Network Scale では尋ねられる. たとえば「少なくとも月に 1 回, 会ったり話をしたりする家族や親戚は何人いるのか」「あなたが助けを求めることができるくらい親密であると感じることができる友人は何人いるのか」などである.

現在, Lubben Social Network Scale は改訂版と短縮版がそれぞれ作成されている (Lubben 2002; Lubben et al. 2006). いずれにおいても「家族」「友人」の 2 項目で, 改訂版においてはそれぞれ 6 つ, 短縮版ではそれぞれ 3 つの質問が用意されている. 短縮版では, 人数を尋ねられる各質問において 0 から 5 点が与えられ, 30 点中 12 点未満の回答者が「社会的孤立」の状態にあると見なされる (表 2-2).

○「家族」：生まれ育った，結婚した，養子縁組した等等の人々

-
- ①1か月で最低1回は会ったり連絡をくれたりする親類はどのくらいいますか
→0=いない, 1=1人, 2=2人, 3=3~4人, 4=5~8人, 5=9人以上
-
- ②私的な事柄を話すことによって安心感をいただけるような親類はどのくらいいますか
→0=いない, 1=1人, 2=2人, 3=3~4人, 4=5~8人, 5=9人以上
-
- ③手助けをもとめられるくらい親しいと思う親類はどのくらいいますか
→0=いない, 1=1人, 2=2人, 3=3~4人, 4=5~8人, 5=9人以上

○「友人」：近隣に住む人を含む，すべての友人

-
- ④1か月で最低1回は会ったり連絡をくれたりする友人はどのくらいいますか
→0=いない, 1=1人, 2=2人, 3=3~4人, 4=5~8人, 5=9人以上
-
- ⑤私的な事柄を話すことによって安心感をいただけるような友人はどのくらいいますか
→0=いない, 1=1人, 2=2人, 3=3~4人, 4=5~8人, 5=9人以上
-
- ⑥手助けをもとめられるくらい親しいと思う友人はどのくらいいますか
→0=いない, 1=1人, 2=2人, 3=3~4人, 4=5~8人, 5=9人以上

表 2-2 Lubben Social Network Scale-6 (LSNS-6) (Lubben et al. (2006) より作成)

「社会的孤立」を測定するための尺度の議論は, 尺度それ自体や指標として何が選ばれて

きたのか、そしてそれにより何をもって「孤立」とするのかをめぐり、展開されてきた。ここで取りあげた尺度のほかには、理論的な背景を異にするが、たとえば Wenger の「社会的孤立指標」がある。それは「独居であるかどうか」「外出するかどうか」「電話をもらうかどうか」「隣人の住居との距離はどれほどか（50 ヤード以内か）」などを尋ね、それらの総計によって「孤立」の度合いを測定するものである（Wenger & Burholt 2004）。

いずれにせよ「社会的孤立」の尺度は、客観的に測定可能な他者との「接触」とその可能性に注目して尺度が考案されてきたと言える。この時、接触の「数」自体も重要だが、それがどのような他者との接触で、どの程度の重要性をもつ接触であるのか、つまり、先述の Townsend の言葉を用いるとするならば接触の「機能、強さ、持続」をも取り込んだかたちで発展してきたと言える。それは、たとえば、Lubben Social Network Scale では、高齢者にとって「家族」「友人」の領域が重要な社会関係であると考えられていたこと、Cohen の尺度では、自己のアイデンティティを構成する領域との統合の度合いが測られていたことに見ることができる。

さまざまな尺度が考案されてきた一方で、どういった要因が「社会的孤立」の要因と考えられるのかについて、当の「社会的孤立」の状態と強い相関性のある要素を量的に調査する研究群もまた存在する。どういった要素が、「社会的孤立」の要因と考えられるのか、もし今後尺度それ自体を再考しようとするならば、そうした研究群での議論もまた我々は参照していく必要があるはずである。

2.3 社会的孤立尺度の批判的検討

2.3.1 曖昧なカットオフポイントへの批判

先に見た「社会的孤立」の尺度についてここまで、それぞれが「接触」の範囲に関してどこまでを含めるのか——「家族」「友人」までなのか宗教などの社会集団への参加までを含めるのか——を争点とする形で記述してきた。

他方でこれらの「社会的孤立」の尺度はいずれも複数の質問項目に対して割り振られた得点の合計によって孤立した状態か否かを評価する仕方をとっている点で共通するが、その際に次のような問題点を抱えていることが指摘されてきている。

斉藤雅茂は、こうした尺度の「多くは孤立状態か否かを判断する基準（カットオフポイント）を設けているが、そこに明確な理論的ないし統計的な根拠があるわけではない」ことを問題点として挙げる（斉藤 2018: 49）。すなわちこれら尺度における合計得点の何点から上ないしは下を社会的に孤立しているかどうか、その足切り点をどこに設定するのかが以上のような事情により恣意的にならざるを得ないため、その設定次第で誰が孤立しているのか否かの結果が大きく変わらざるを得ないことになってしまう。

他方で「社会的孤立」には、多次元の尺度による研究だけでなく、「単一の変数、もしくは、複数の変数の組み合わせから孤立状態を操作的に定義した研究」（斉藤 2018: 20）が存在している。斉藤が例に挙げているものとして例えば、「過去 2 週間、他者との交流が全くなかった人および表面的な交流（挨拶など）しなかった人」（Lowenthal 1964）を挙げている。また斉藤自身は「交流頻度が週 1 回未満・月 1 回未満」が孤立状態を表わす一つの基準となりうると述べている（斉藤 2018: 62）。

ただし、多次元の尺度に限らず、こうした単一の変数や指標によって孤立しているかどうかを測る方法についても、依然としてどのような指標を設定すれば孤立状態として見なされるのかという問題、つまり過去どのような時間的範囲においてどの程度の接触や交流があるのか、あるいはないのか、この基準をどのように設定することが社会的に孤立した状態であるとして妥当なのかという問題は残り続ける。また、その指標が含める時間的範囲によっては、調査が行われた時期において体調不良などを原因に例外的に他者との接触や交流が少なくなってしまう等事情によりその人物が孤立状態にあるのかどうかを把握し損なう可能性ということも報告されている（斉藤 2018: 21）。

他方でこうした単一指標によるアプローチは、孤立状態を見定めるうえで基準が明確で、誰が孤立していて誰が孤立していないと言えるのかを切り分けやすくさせるという利点をもつ。依然残り続ける問題としての孤立か否かの足切り点（カットオフポイント）についての理論的根拠それ自体をここでは探究することはできないものの、単一指標におけるこうした利点を踏まえながら、孤立研究においてありうる思索の方向性を模索してみよう。

2.3.2 「社会的孤立」の再考

そこで、「社会的孤立」の概念的な定義や議論をあらためて注意深く検討してみたい。これまで我々は Townsend の「家族やコミュニティとほとんど接触がないこと」という定義を「社会的孤立」の状態であると見なしてきた。一方でそうした孤立の状態は「社会的接触の数によって、面接した人びとを尺度の上に位置づけてみる」方法で測られるものであった。この孤立の概念的定義と尺度測定の方法に加え、Townsend が「社会的孤立」についてその他にどのような含みを持たせた議論をおこなっていたのか、さらにそれに対してどのような理論的検討がなされてきたのか。

河合克義は Townsend の孤立に関する次のような記述に注目して、「社会的孤立」の定義を拡張する方針を示している。それとはすなわち Townsend の「社会的にも経済的にももっとも貧しい人びとは、家庭生活からもっとも孤立した人びと」（Townsend [1957]1963=1974: 227）であるという記述である。河合によれば、Townsend は孤立と貧困の関連性を重視している。しかしながら Townsend の孤立を測定するための尺度は実際のところ「親族、地域、

友人そして専門家のネットワークに限定されて」いることから、その孤立尺度には「孤立問題をもたらす社会的背景が明確ではない」という特徴が存する。河合は「ネットワークが希薄であることが社会的孤立の原因のすべてではないのであり、孤立問題の背後にある要因も問われなければならない」として、したがって河合は「タウンゼントの定義をもう少し大きな視点で捉えること」が必要であると述べる（河合 2013: 5）。

こうした理論的関心に基づいて河合が目的とするのが「孤立の測定指標の模索であり、またその指標に基づく量的把握」（河合 2013: 11）であったとするならば、定義としての「社会的孤立」やそれが含意しうる内容を今一度探究することも重要な意義を持つことになるはずである。そこでまずは河合の言うような、社会的背景すなわち孤立を生み出すと考えられている「孤立問題の背後にある要因」を、どのようなものと理解することができるのかを、河合（2009）にならって、Townsend と並んで現在においても大きな影響力をもつ J. Tunstall の『老いと孤独』の議論を参考に見てみよう。

本稿序論でも論じられた通り、Tunstall の理論の最も大きな特徴は、「社会的孤立 (social isolation)」や「孤独 (loneliness)」など孤立に関係する諸状態や諸概念を包括する上位概念として「独存 (aloneness)」を置いているという点にある。Tunstall は「社会的孤立」と「孤独」の区別という Townsend の着想に依拠しながら独自の修正を加えている。とりわけ本節で注目したいのが、彼が「独存」の下位概念として「社会的孤立」などと並んで「アノミー」という概念を置いていることである。

Tunstall が自らの理論のうちに取り入れた「アノミー」概念は、社会学者の E. Durkheim や R. Merton によって使用されるそれである（Tunstall 1968=1978: 57）。Tunstall の「アノミー」は、Durkheim や Merton のそれに影響されたもので、社会統合の希薄した状態を意味する。Tunstall はこの「アノミー」について、①「低社会階層および社会参加の欠落したグループと関連性をもつ」②「女子よりも男子老人の方に強い」③「無死の配偶喪失者および独身とは積極的な関連性が認められない。定年退職が鍵をにぎっているように見受けられる」と説明している（Tunstall 1968=1978: 45）。

それでは Tunstall において「アノミー」は、どのようなかたちで孤立問題と関連しているのであろうか。Tunstall の概念規定についてはやや曖昧なところが残るが、彼の「社会的孤立」は、Townsend にも見られたような「接触」の得点化によって測定されるものである。ただし Tunstall は、孤立について明確に「社会参加による規定づけをとらなかった」（Tunstall 1968=1978: 55）と述べている。というのも、クラブや教会の集まりといった社会組織への参加が——彼が調査を行ったイギリス独自の性質のためかもしれないが——孤立化と関連をもたないと考えられているためである。また、彼は社会的孤立と階層との関連性もみられないとも述べる。つまり Tunstall の「社会的孤立」は、社会参加や階層性といった背景的要因

を加味しない傾向がある。その意味で Townsend のそれよりも限定的で、他者との「接触」それ自体により焦点を当てたものとなっていると言える。

では、そうした諸要因や社会的背景との理論的な関連の議論は Tunstall においてどのように扱われているのか。それが取り扱われ、「社会的孤立」概念に代わって理論的に含まれるのが前述した「アノミー」である。河合は Tunstall が「アノミーについては社会的背景との関連性をみているが、それ以外の用語は他の研究者のそれとは異なった使い方をしている」（河合 2009: 27）と述べている。本節も河合の見立てに従いつつ、Tunstall が「社会的孤立」に関しては、「接触」の数を、「アノミー」に関しては孤立問題の要因とも考えられる「社会的背景」をそれぞれに割り当てているとして見ていこう。

「接触」の数と「社会的背景」とを区別する、あるいは「社会的孤立」概念から上記のような「社会的背景」を切り分けるということについては次のような議論と重なる部分がある。例えば、これまで見たように Berkman-Syme Social Network Index から Lubben Social Network Scale への議論に見られたように、得点尺度の範囲を（高齢者の）「家族」「友人」に限定し、その「接触」に注目するというアプローチがそれであると見ることもできるだろう。

ただ一方で、Townsend 版の議論に含まれている孤立の「社会的背景」の側面についても無視することはできないように思われる——Townsend の孤立尺度には含まれていなかったとしても、である。その理由は、「接触」の数ないし頻度だけでは社会から孤立しているということの実態を把握するのに十分ではないように思われるためである。たしかに「接触」の数が少ないという事態は「ネットワークが希薄である」という状態を示しはするが、たとえば社会的に孤立している人が何を欲しているのか、その自立を妨げている要因は何か、当人の意図せざるかたちで孤立化する方に進ませる要因は何かなど、生活の実態に関する把握に関しては不十分であり、それらに対する理論的な説明もまた重要であるように思われる。

さらには、こうした「社会的背景」を尺度や指標の作成自体に組み込むということも不可能ではないと思われる。この「社会的背景」を経済や階層だけに限定せず、例えば文化や通念としての社会規範などとの関わりを含めていくことが可能である。河合の使用する指標のひとつに「正月 3 が日の過ごし方」について尋ねる項目がある（河合 2013: 11）。「正月 3 が日」という親族と過ごすものであるという文化的背景、親族が集合するために労働を休み実家に移動するという労働と経済的な背景などを含み込んだ指標の作成がこれである。

本節は、そうした具体的な提案をおこなうことまでを試みるものではないが、これまでの「社会的孤立」に関する議論からいくつかの研究の方向性を示した。最後に孤立の要因としての「社会的背景」についての議論を少しばかり参照し、まとめとしたい。

2.4 孤立の諸要因

たとえば先に見たように、Cohen が自身の Social Network Index を考案した際に依拠したのは、Thoits の「社会的孤独」を個人のアイデンティティから捉えようと試みた研究であった。これは、社会的孤立を、社会的アイデンティティ（結婚、学生、被雇用、集会への参加、教会通いなど）の少なさとして捉え直して、孤立と心の健康の関係について調査した研究である。ちなみに Thoits は、アイデンティティを多く所有すればするほど、心の健康の度合いが高いと結論づけている (Thoits 1983)。

このように「社会的孤立」を説明するための、いわば変数をどのように設定しうるか、何が変数になりうる可能性をもつものとして考えられるのか。尺度に関して概観した我々は、本節の最後に、そのアイデアをとりだすという目的のもとに、いくつかの先行研究を概観してみよう。

「高齢男性」「ひとり暮らしの高齢者」「気分または認知に障害がある人」で、「社会的孤立」のリスクが高くなるとした研究として、Iliffe らの研究がある。彼らはロンドン郊外に住む 65 歳以上の非障害者 2641 人を対象に、年齢による「社会的孤立」のリスクの程度について調査した。そこでは、高齢群の 15%以上は社会的孤立のリスクがあり、このリスクが加齢とともに増加したとされる (Iliffe et al. 2007)。「男女差」「家族構成員の数」「良好なクオリティ・オブ・ライフ (QOL) をもっているかどうか」もまた「社会的孤立」と相関があるとしたのが、イタリアで 2005 年から 2007 年に募集された 70 歳以上の 580 人の入院高齢者について対象におこなわれた Giuli らの研究である (Giuli et al. 2012)。この 2 つの研究では、「社会的孤立」の尺度として Lubben Social Network Scale が使用され、それにより「社会的孤立」とみなされた人びとが、上記の特性をもっている傾向が示されている。

さらに、アメリカでの「人種」「貧困」「周囲の世帯の低所得率」「学歴」が「社会的孤立」に影響を与えるとしたのが Tigges らの研究である。この研究では、「独居ではないこと」「話し合いができる世帯外のパートナー」およびその「数」などにより、「社会的孤立」の状態かどうか測定され、とりわけ「黒人の貧困層」かつ「大卒未満の学歴」が「社会的孤立」になりやすいことを示した (Tigges et al. 1998)。

ここでの言及は、「社会的孤立」の要因に関する諸研究の一部に過ぎない。しかしながら以上に挙げられたような諸要因は、たとえば、「男性は女性に比べて孤立しやすい（あるいはその逆）」、「周囲に比べ相対的に貧困であることはその人物を孤立の状態に置きやすい」などのかたちで析出されることになるだろう。それにより「社会的孤立」に対する社会的支援を必要とする層とどのような支援が必要なのかを指し示すのに役立つ、ということが第 1 に言える。「学歴」に関して、比較的高いとされている層 (Tigges らの場合、「大卒者」) に見込まれる水準の社会的スキルの獲得を目的とした教育的支援が必要である、というよ

うなかたちでサポートの内容を明確化することにつなげることができる。「社会的孤立」の要因の分析から示されるこれら要因は、何よりもまずこうした社会的支援の文脈において重く受け止められなければならないだろう。

第2に、以上の内容は「社会的孤立」の「社会的背景」をどのように今後の研究において役立てることができるか、という目的において概観したものである。「社会的孤立」の問題は——これは図式的な整理に過ぎないが——Tunstall 的な定義においては「接触」の数や頻度を測定することが何にもまして重要だが、Townsend 的な（あるいはその拡張）それにおいては、社会的に孤立しているという事態がどのような実態として把握されるのかまでを問う必要がある。また、この方針は、「社会的孤立」の問題を、その「接触」の数や頻度の問題としてのみならず、Townsend による「接触の機能・強さ・持続」までも含むことが望ましいとした記述にも沿うものであると思われる。「社会的孤立」の定義であれ尺度の作成であれ、これら「社会的背景」「社会的要因」を含められるような研究上の方針をより十全に示すことについては今後の課題としたい。

2.5 おわりに

本節は、はじめに、「社会的孤立」に関する定義に関して、古典の1つである Townsend の議論について概観することからはじめられた。そこでは「社会的孤立」は「家族やコミュニティとほとんど接触がないこと」と定義され、それを測定するために Townsend は「接触」の数という基準を示していた。次に我々が確認したのは、そうした「接触」の数や頻度、さまざまな社会的領域における範囲で測定をおこなう Lubben らの多次元的尺度である。Lubben Social Network Scale は現在において広くもちいられる尺度であるが、他方でどの程度の接触回数以上が孤立しているのか否かを定めるカットオフポイントについて理論的に曖昧であることなどの批判も存在するというところを見た。複数項目からの得点化によって「社会的孤立」を測定するアプローチのほかに、なんらかの単一変数によって孤立しているか否かを判断するアプローチについても確認したうえで、最後に我々が見たのが「社会的孤立」における背景となる「社会的要因」についてである。

この「社会的背景」「社会的要因」をどう扱うことができるのかにおいて、1つは「社会的孤立」の実態に対する把握をより深めることという目的において、もう1つは「社会的孤立」の尺度を作成するためのアイデアとして受容することを挙げた。いずれにおいても大きな課題ではあり、今後さらに孤立研究をおこなう上で独自の議論を展開するためには不可欠であると考えられる。

「社会的背景」「社会的要因」という論点を引き出すために参照した Tunstall の議論では、これらは「アノミー」という概念に含まれるものであった。この「アノミー」概念をどのよ

うに活かしていくことができるのかについては本稿の結論部であらためて触れられる。Merton 的「アノミー」について少しばかり言えば、「アノミー」は行為者の目的と手段のズレと理解されるものである。何らかの社会的に広く受容される目的に対して行為者が抱く反応とそれを実現するための手段によって「アノミー」は論じられる。

これをどのように孤立研究で生かしていくことができるか。1 つには、たとえば、相対的に「低い学歴」が孤立化と相関をもつとする議論でいえば、社会学者 P. Bourdieu の「文化資本」の議論が参考になる。実際に Tigges らは Bourdieu の「文化資本」の議論を引き合いに出し、他者とのネットワークとしての「社会関係資本」の総量を説明している (Tigges et al. 1998)。これが示すのは「文化資本」の総量が他者とのネットワークとしての「社会関係資本」の総量に転化されるという議論だが、この際に、手段の有無をこの議論は説明するものであるように思われる。より詳細な議論はのちに譲るが、こうした「アノミー」論をより抽象度を高めて「社会的孤立」を説明するという方針を最後に示して本節を閉じることにしたい。

[注]

- 1) なお日本語論文件数は、件数 1 が長く続いたあと微増し、その後 50 倍と増加している。
- 2) 前島直樹によれば、日本版の総合的社会調査 JGSS でも、2003 年にコア・ディスカッション・ネットワークをもとにした調査がおこなわれているという (前島 2019)。

3 孤独研究について

3.1 孤独の概念

社会的孤立に関する研究の対象とされるかぎりでの孤独は、社会的孤立を不快なものとして経験すること (Perlman & Peplau 1984), あるいは社会的関係に対する欲求と充足の差に対する不満 (de Jong Gierveld & Kamphuis 1985) と解釈される。さらには、単に「認知された社会的孤立」(Cacioppo & Hawley 2009) と言い換えられることもある。それゆえ、社会的孤立が社会的関係の量と質から客観的に判定されるのに対し、孤独は主観的なものである、といえる。

しかし、孤独は社会的孤立の経験である、という言い換えは、研究史的に見て不十分である。なぜならば、孤独を引き起こすのは、社会的孤立だけではないからである。

このことを理解するためには、人間関係を友好関係 (affiliation) と愛情関係 (attachment) に区別することが必要である。簡潔に述べれば、友好関係は同僚や友人、親戚との繋がりを指すのに対し、愛情関係は親子関係やその他の家族との愛着的な関係を指す。そして、本稿でこれまで扱ってきた「社会的孤立」は、主として友好関係を指している (第2節)。しかし、愛情関係の欠落もまた、孤独を生じさせることは明らかであろう。このように、欠落している関係の種類によって孤独を分類し、「孤独」という語を統一的に用いるならば、「社会的孤立の経験」という言い換えは必ずしも成り立たない。

愛情関係と友好関係の区別に基づいて孤独の種類を区別する傾向は、孤独研究の初期から存在している。多くの研究は、愛情関係の欠如に起因する孤独を情緒的孤独 (emotional loneliness), 友好関係の欠如に起因する孤独を社会的孤独 (social loneliness) と呼び、この区別の由来を Weiss (1974) の『孤独—情緒的および社会的な孤立の経験』に求めている。Weiss および同書への寄稿者ら¹⁾は、情緒的孤独および社会的孤独という表現を用いておらず、実際に用いられているのは、「情緒的孤立の孤独」(loneliness of emotional isolation) と「社会的孤立の孤独」(loneliness of social isolation) である (Weiss 1974: passim)。情緒的孤立の孤独が「親密で情緒的な愛情関係 [attachment] の不在によって生じる」(Weiss 1974:33) ものであるのに対し、社会的孤立の孤独は「社会的統合の関係 [socially integrative relationships] の欠如によって生じる」(Weiss 1974: 33) と特徴づけられており、これが情緒的孤独と社会的孤独の区別の原型であるといっていよう²⁾。「情緒的孤独」「社会的孤独」という語がより一般的であり簡潔でもあるため、以下ではこちらを使用する。

後述する (3.4) SELSA の作成者である DiTomasso & Spinner (1993) は、情緒的孤独を、恋愛に関する孤独 (romantic loneliness) と家族に関する孤独 (family loneliness) に区別した上で、学生を対象とした調査をもとに、社会的孤独と2つの情緒的孤独のそれぞれの相関の

低さと内的整合性の高さから、3つの孤独は異なるものであると論じている。これに対して、より年齢層の高い集団を対象とした調査では、3つの孤独は高い相関を示すという。とはいえ、これは、孤独の3分類に対する反証となるわけではない。というのは、年齢が高くなるほど結婚し家庭を有している対象が多くなるため、それぞれの孤独に対応する社会的支援の源泉が重なることになるからである。

このことは、孤独を引き起こす出来事がかかわる人間関係の種類によって、孤独の種類が決定されるわけではない、ということの意味している。つまり、同一の人間関係に生じる、同一の出来事が、情緒的孤独と社会的孤独の両方の引き金になることがある。たとえば、ある女性が配偶者に先立たれた、という場合には、その女性は愛する家族を失ったことにより、情緒的孤独に陥ることになる（とくに高齢の場合）。だが、死別によってその女性は、配偶者を介して結びついていた人間関係を利用できなくなる危機に晒され、さらに、既婚者（妻）という社会的アイデンティティから行動と人生の指針を得ることができなくなってしまう³⁾。それゆえ、配偶者との死別は彼女にとって、情緒的孤独および社会的孤独の原因にもなるのである。

多くの研究において情緒的孤独と社会的孤独は区別されずに使われていることが多い。以下でも、3.2 および 3.3 では両者の区別をせず、孤独一般について説明する。深刻な孤独に陥る人の割合が多いのは高齢者であり、すでに述べたように、高齢者に関しては情緒的孤独と社会的孤独を区別する必然性は薄いかもしれない。しかし孤独は普遍的な現象であり、青少年の孤独と自殺の関係についての調査（Schinka et al. 2012）など、若年層を対象にした研究もなされている。そうした研究の場合には、2つの孤独を区別することは有意義であるといえよう。

3.2 孤独の社会的要因

孤独についての研究に際して重要なテーマの1つが、孤独の要因、すなわち、孤独になりやすい人の性質や、人を孤独にしやすい出来事についての調査であることは、いうまでもない。孤独の要因は、個人的なレベルと社会的なレベルの双方で研究されているが、個人的なレベルでの要因は、概ね我々の直感に反しないものばかりである⁴⁾。

それゆえ、以下では、de Jong Gierveld & Tesch-Römer（2012）の提示するモデルに基づいて、孤独が生じる際の社会的な要因、および、抽象的に捉えられた個人的要因が社会的要因と関係する仕方について整理する。

個人的水準からはじめよう。彼女らによれば、まず、社会的関係に関する必需（social needs；以下、社会的必需）と、社会的関係についての期待（social expectations；以下、社会的期待）を区別しておく必要がある。これらは、概念的に異なるのはもちろんのこと、後述するよう

に、社会的水準での要因が孤独に与える経路として、異なる役割を果たすからである。前者は、人間が社会的動物であるがために必然的に有する、社会的統合の必要性であり、後者は個々人が社会的な関係としてどの程度のものを欲するか、ということの意味する。社会的必需は、同じ人間である以上それほど変わらない。子供は親の保護を必要とし、成人も全く他人抜きで生活することなど不可能である。老後には他人から介護されたり、医療機関の世話を受けなければ、豊かに生きていくことはできないだろう。他方で、社会的期待の方は、社会ごと、個人ごとに多様でありうる。家族を老人ホームに入れることを是としない風潮があれば、入れられた人間はより孤独を感じるであろうし、また、他者との親密な交流を求めない気質の人間は、独身であっても、それほどの孤独を感じないだろう。こうした点で、社会的期待は社会的必需とは異なる。

また、社会的必需の充足、すなわち社会的統合は、生活水準 (quality of living conditions) によって変化する。当然ながら、豊かであればそれだけ、サービスを楽しむことができ、また生活の維持に煩わされずに社会的関係の構築に努めることができるからである。また、生活水準そのものが抑鬱などの症状を通じて、社会的統合を介さずに孤独に直接影響を与えることも考えられる。

こうして、個人的な水準においては、生活水準、社会的統合、社会的期待という3つの要因があり、それらの度合いに応じて、孤独の度合いが決定されると考えられる (図 3-1 下部)。

続いて社会的水準での要因に移ろう。社会的要因は、社会福祉の豊かさ、人口統計学的な構成、文化的規範・価値観の3つに大別される。これらは個人的水準における3つの要因のそれぞれに影響を及ぼすが、特に注目すべきは社会的期待との関係である。

文化的規範は、社会的期待に影響を与える。たとえば、「年老いた親については、子供が同居して面倒を見るべきだ」という考えが浸透している社会では、老人は子供と同居することを当然のこととして期待するであろうし、結果として、子供と離れて暮らしていたり、そもそも家族のいない高齢者は、孤独を感じるようになるだろう。だが、これに対して、そうした規範が希薄であり、自助努力に価値を見出すような風潮の強い社会では、独居することは強い孤独感の原因にはならないと思われる。あるいはむしろ、子供と同居することが、介護の負担を負わせているという負い目につながり、逆に孤独感を強めることも考えられる。

個人の属する社会の人口統計学的構成もまた、社会的期待に影響を与える。例えば、出生率の高い社会では、出生率の低い社会より、子供のいない成人の孤独は大きくなるのが考えられる。また、社会が豊かである場合には、生活の維持に回す労力が減り、社会的関係を築きやすくなる一方、社会が貧しい場合、輻輳の結果として孤独が生じる可能性がある他、間接的な経路として、相互の信頼が失われ、相対的な貧困の認知が増大することによって、

実際の孤立度合いに比してより大きな孤独が感じられることがありうる。

もちろん、社会的水準における3つの要因は、個人的水準における残る2つの要因、すなわち、生活水準と社会的統合にも影響を与える。社会福祉の豊かさは、当然ながら、個人の生活水準に影響を与える。そして、社会福祉、人口学的構成、文化規範のすべては、社会的統合に影響するだろう。

また社会的水準における3つの要因は、相互に影響すると考えられる。たとえば、社会福祉が豊かでない場合には、その欠如分を賄うために、親類縁者が支え合わねばならず、結果として、家族や親族といった規模での社会的統合を重視する文化的規範が根付くことが考えられる。

以上のように、孤独と孤立の関係をごく抽象的に記述し、人生における特定の出来事や個々人の具体的な性質に言及しない場合でも、孤独は、個人的・社会的な水準における複数の要因が複合的に作用して生じるものだといえる。

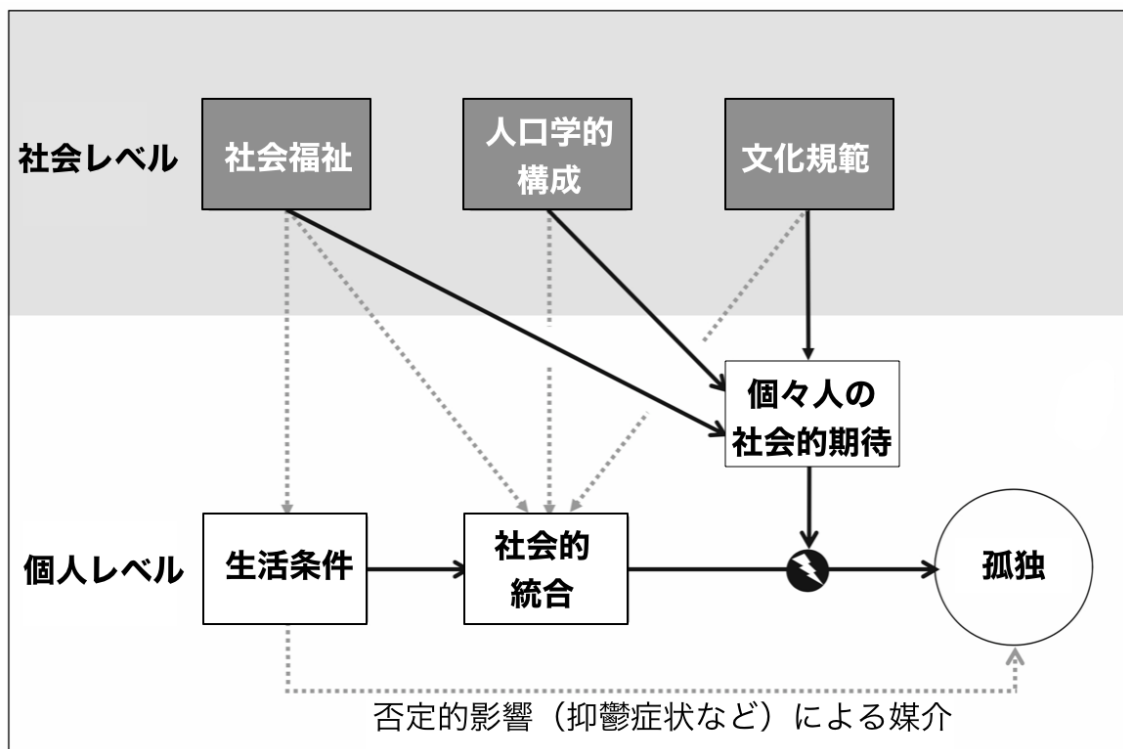


図 3-1 de Jong Gierveld & Tesch-Römer 2012 による。なお、図中灰色の破線矢印は主効果を、黒の実線矢印は交互作用を意味する。

3.3 孤独の影響

多少比喩的な言い方が許されるならば、孤独は社会的な痛みである、と述べることができ

る。身体の痛みが身体の不調を表す合図であり、不調を解消するように働きかけるのと同じく、孤独もまた、社会的孤立を知らせ、社会的関係を回復せよと促す合図だと考えられる (Cacioppo & Hawkley 2009)。

他方で、孤独はそれ自体害をもたらすものともみなされ、それについての研究も盛んである。とはいえ問題は、孤独のもつ捉え難さにある。第1に、孤独は意図的に作り出し制御することはできないため、調査対象者の日常生活に孤独の現れを見出す他に方法はない (Russell, Peplau & Cutrona 1980)。たしかに、社会的孤立の非常に単純なものについては、それが健康に与える影響を調査するために、動物実験が行われる場合もあり、こうした事例は、人工的な孤立ないし孤独の例であると述べることもできる (Knox & Uvnäs-Moberg 1998; Scaccianoce et al. 2006; Stranahn, Khalil & Gould 2006; Cacioppo et al. 2011)。しかし、そのようにして遂行できる研究はごく一部である。こうした理由により、ある現象が孤独の帰結であるのか、それとも孤独の原因であるのか、という点を区別するためには注意を要する。第2に、孤独は社会的孤立と密接に結びついているため、ある現象が孤独の帰結なのか、それとも社会的孤立の帰結なのか、はっきりしない場合がある。さらにまた、愛情関係や友好関係の欠落と結びついている以上、孤独は社会的な現象であるとともに、それ自体としては、孤独は個人の経験である。こうしたことから、孤独というものが果たして存在するのか、それとも、孤独は他の現象と同一なのか、と問うてしかるべきであるといえよう。

まず、孤独を独立した現象として扱うことを支持する研究について紹介しよう。Cacioppo, Hawkley & Thisted (2010) によれば、孤独は抑鬱を予測 (predict) するが、抑鬱は孤独を予測せず、さらに、孤独が抑鬱に対して与える影響は、社会的孤立や認知されたストレス、神経症といった要因には還元されないという結果が出ている。これらの結果は、2つの示唆を与えてくれる。第一に、少なくとも、抑鬱のリスクを測定するという目的がある場合には、孤独を孤立と区別して測定する必要があるということ。第2に、孤独と抑鬱は、否定的な心的状態であるという点で共通しているが、相互に区別されうることである。

また、孤独が独立した現象かどうか、という問題は、個々の孤独尺度の設計に関する問題でもある。すなわち、孤独尺度が本当に孤独を、そして孤独だけを測定しているのか、という、識別的妥当性の問題である。しかし、孤独尺度が作成される際にその妥当性の基準とされるのは、多くの場合、他の尺度との相関や被験者の自己申告との相関であり、識別的妥当性を扱った研究は少ない。例外的に、UCLA 孤独尺度 (後述) の第2版では、識別的妥当性についての試験が行われ、肯定的な評価がなされている (Russell et al. 1980)。

孤独は他の現象から区別される独立した現象ではあるが、あらゆる場合において孤独を他の現象から区別することに意味があるわけではない。孤独によってもたらされるとされる他の害のうちには、孤独と孤立を区別する必要がないとされるものもあるからである。た

たとえば、Holt-Lunstad et al. (2015) によれば、死亡率 (mortality) との関連では、孤独と孤立は区別する必要がない。また、Tanskanen & Anttila (2016) や Steptoe et al. (2013) の研究では、孤立が死亡率と相関するのに対し、孤独は相関していないと報告されている。

最後に、孤独の独立性の問題を離れて、孤独の影響のうち興味深いものとして、孤独が心の能力に与える影響について紹介しよう (この点については、Cacioppo & Hawkley (2009) によるレビューが参考になった)。

第1に、孤独は認知能力に影響し、認知を偏向させる効果がある。孤独は否定的な気分を生むだけでなく、否定的な社会的刺激、ないし社会的脅威への注意を増大させ、肯定的な社会的イメージへの反応を鈍くするとされる。たとえば、Yamada & Decety (2009) によれば、孤独な人間は好みでない顔に表出される苦痛に対してより敏感になるという。

また、Cacioppo et al. (2009) は、孤独な人間は孤独でない人間よりも、快適なイメージによって脳の報酬関連領域の活動が刺激される度合いが小さいという実験結果を出している。すなわち、孤独な人は、悪い社会的結果を予期・回避する傾向が強まり、よい社会的結果を求める動機づけが弱まることになる。また、こうした傾向はそれ自体孤独を帰結することは容易に予想できるだろう。実際、Gable (2006) によれば、社会的連帯への希望が大きい人間は、そうでない人間よりも、孤独の度合いが小さいという。

第2に、孤独は自己統制の機能を低下させるという。すなわち、認知・感情・行動を認知的に制御するために必要な認知機能である、実行機能に対して、孤独が悪影響を与えることが知られている。Cacioppo et al. (2000) によれば、孤独な人間は、指示を与えられた方向に注意を集中する能力が低下するという。また、Hawkley et al. (2009) は、孤独な人間は快を求め苦痛を避ける自己統制機能が低下するという調査結果を提示している。

さらに、Cacioppo et al. (2009) によれば、孤独は他人へと伝播する傾向があるという。具体的には、孤独は3次の隔たり (知り合い関係を辿って3人目) まで伝播し、その度合いは男性よりも女性の方が強いとされる。その際、(1) 孤独は伝播によって強まる (もともと孤独であった人よりも、伝播によって孤独になった人の方が孤独になる)、(2) 両者の関係が密接であるほど、伝播後の孤独は強まる、(3) 孤独の伝播のもつ特徴は抑鬱に付随するものではない (抑鬱の影響を抑制しても、これらの特徴は変わらない) という特徴を持つとされている。

3.4 孤独の尺度

3.4.1 UCLA 孤独尺度

アメリカ合衆国では、1970年代には孤独が一般的な問題として認められており、経験的な調査のため、孤独の尺度を作成するという試みも、すでに1960年代からなされていた

(Russel et al. 1978). UCLA 孤独尺度 (Russel, Peplau & Ferguson 1978; Russell et al. 1980; Russell 1996) もまた、そうした研究成果の 1 つである。UCLA 孤独尺度は、おそらく現在の英語圏でもっとも広く用いられているものであり、日本語版の作成とその妥当性の検証を課題とした研究も存在する (舛田ほか 2012)。

UCLA 孤独尺度は、それまでの研究で用いられていた尺度が、多すぎる質問項目、低い内の整合性、外在的な妥当性の基準の欠如といった問題を解決できていないという状況を受け、孤独を測定する単純で信頼できる方法を確立することを目指した、初期の成果である。様々な研究で使用された際に判明した改善点を反映させ、約 20 年間のうちに 2 回の改訂がなされており、その点でも信頼性の高いものであると言える。

UCLA 孤独尺度の最初の改訂、すなわち、第 1 版から第 2 版への改訂の際にまず問題視されたのは、第 1 版の質問項目は「方向」が全て同じだという点であった。つまり、全ての質問項目が、肯定的に答えることによって孤独を表現するものになっていたのである。こうした質問文の性格が回答に影響する可能性を考慮して、第 2 版以降では、肯定的な質問と否定的な質問がほぼ同数になるよう、調整されている。

第 2 版から第 3 版への改訂に際しては、表現の簡素化にとくに注意が払われている。これは、同尺度が様々な研究に使用されるようになったことの結果でもある。第 1 版および第 2 版は、その作成そのものが、大学生を対象とした紙のアンケートを用いた調査であったのに対し、同尺度を使用した研究には、大学生以外を対象としたものや、メールやインタビューといった、遠隔での調査や口頭での調査を含むものがあつた。そのように、対象者や質問方法が多様化したことにより、質問項目が理解しづらい場合があるという問題が浮上した。第 2 版への改訂の際に、2 重否定を用いる質問が追加されたこともその一例である。第 3 版では、質問項目を単純にするとともに、全ての質問項目が “How often do you feel…” で始まる疑問文に変更されている。これは、特に電話での調査に役立つことを意図してのものであるという。

また、質問項目が「孤独」(loneliness) という語を直接含んでいると、対象者 (とりわけ男性) がより低い孤独度を申告する傾向にあるとして、UCLA 孤独尺度は「孤独」という語を含まないように作成されている (ただしどの版にも、“alone” という語を含む質問項目は 1 つある)。

質問項目に「孤独」という語を含まないという方針は、後述する 2 つの尺度にも共通することである。これに対して、「孤独」という語を使わないことによって、孤独についての研究者の考えが反映されてしまうという異論がなされることがある。だが、孤独についての対象者自身による把握との関連性は、尺度作成の際に自己評価との相関を調べることによってある程度確認されていることである。それゆえ、実際に使用する尺度では、直接的な表現

を使わず、かつ同じ種類の孤独についても複数の項目で訊くのがよいとされる (de Jong Gierveld et al. 2018: 392)。

3.4.2 de Jong Gierveld 孤独尺度と SELSA

UCLA 孤独尺度ほどではないが、広く使用されている孤独尺度として、以下では de Jong Gierveld 尺度と SELSA (Social and Emotional Loneliness Scale for Adults) を紹介する。これらは、UCLA 孤独尺度と異なり、孤独を多因子的なものとして扱っているという特徴がある。

DiTomasso & Spinner (1993) の作成した SELSA は、その名の通り、情緒的孤独と社会的孤独を区別して測定するためのものである。上述したように、SELSA は情緒的孤独を恋愛に関する孤独と家族に関する孤独に区別し、社会的孤独を合わせた3つの種類に、質問項目を区分している。質問項目は全部で37項目となっているが、項目数を15まで減らした短縮版の SELSA-S (DiTomasso et al. 2004) も作成されている。

de Jong Gierveld ら (de Jong Gierveld & Kamphuis 1985; de Jong Gierveld & van Tilburg 1999) の作成した尺度は、11項目からなるもので、質問項目自体が区分されているというようなことはない(6項目の短縮版 (de Jong Gierveld & van Tilburg 2006) も作成されている)。それゆえ、UCLA 孤独尺度と同じく、孤独の種類というよりは度合いを測定することに重きが置かれているといえる。しかし、これらの尺度はもともと34項目のうちからさらに選定されたものであり、それらの質問項目は5つに区分されている。すなわち、深刻な困窮 (severe deprivation)、見捨てられていることなどの個別的な問題状況に結びついた困窮の感覚 (deprivation feelings connected with specific problem situations such as abandonment)、交際の不足 (missing companionship)、親睦の感覚 (a feeling of sociability)、有意義な関係を持っているという感覚 (a feeling of having meaningful relationships) である (de Jong Gierveld & Kamphuis 1985)。それゆえ、もとの区分に従って質問項目を取捨選択ないし区分することによって、孤独の種類を区別して測定することができる。また、質問項目は情緒的孤独と社会的孤独の項目にも区別できるとされている⁵⁾。

これらの尺度はいずれも、先んじて作成され、孤独を単因子的なものとして扱う UCLA 孤独尺度に対する対抗馬という側面を持っている。ただし、UCLA 孤独尺度の作成者である Russel らも、孤独が多因子的なものであるということを否定しているわけではない。実際、情緒的孤独と社会的孤独の区別は、Russel らの研究によっても支持されている (Russell et al. 1984)。

[注]

- 1) 同書は、書誌情報上は Weiss 1 人が著者であることになっているが、彼は編者と各部の序論の執筆を担当しており、同書は実質的には複数人による論文集である。
- 2) なお、Weiss は情緒的孤独について、「情緒的孤立の孤独は、特定の他者の不在に対する主観的反応を表すというよりは、愛情関係にある他者一般 [a generalized attachment figure] の不在に対する主観的反応を表すので、おそらく、青少年期に達する以前には経験されないだろう」(Weiss 1974: 89) と述べており、分離不安等の例を孤独から排除している。
- 3) 社会的孤立を社会的アイデンティティの少なさとそれに伴う実存的安全の欠如として捉える研究としては、Thoits (1983) のものがある。
- 4) de Jong Gierveld et al. (2018) のまとめるところによれば、既存の研究からは以下のようなことが明らかになっている (もちろん、ほぼすべてが欧米で行われた調査である)。孤独は青年期以上のあらゆる年齢層に見られるが、80 歳以上の 40–50% がしばしば孤独に苛まれるのに対し、それより若い中・老年層では 20–30% にすぎないなど、年齢が高いほど孤独な人間は増える傾向にある。経済的に不利な状況にある人間は、社会的接触を最適化・多様化する能力の点でも不利になり、孤独になりやすい。不健康な人間は、孤独になりやすい。移民は言語能力面などでの不利から、孤独になりやすい。性格についていえば、社交能力が低い人間や神経質な人間は孤独になりやすく、孤独を脱却しにくい。結婚・パートナー関係では、一般的にはパートナーがいる人間のほうが孤独になりにくいだが、パートナーとの関係に満足していなければ、むしろ孤独になりやすい。高齢者にとって、成人した子供と同居することは孤独を和らげる。兄弟姉妹の存在は孤独の緩和に役立ち、その死は孤独のきっかけになるが、関係が悪い場合はむしろ孤独の要因になる。友人関係などの非血縁関係も、孤独の緩和に寄与する。
- 5) de Jong Gierveld & Kamhuis (1985) では、情緒的孤独の項目と社会的孤独の項目への区分は明確にはされていないが、de Jong Gierveld & van Tilburg (2006) では明示されている。なお、後者では 6 項目の短縮版尺度が作成されている。

4 社会的孤立・孤独と SNS

4.1 本節の目的

私たちの社会生活に占める SNS をはじめとした情報テクノロジーの存在の重要性は、明らかに増大している。こうした情報テクノロジーがもつ特徴のひとつは、それが私たちの社会生活と不可分なかたちで利用されるということである。であるなら、社会的孤立・孤独もまた、こうした情報テクノロジーとのなんらかの影響関係をそなえている可能性があるだろう。そこで本節の目的は、社会的孤立・孤独と SNS を中心とした情報テクノロジーとの関連についての研究を概観することである。

すでいくつかの研究が、部分的にはあるが、社会的孤立・孤独と SNS をはじめとした情報テクノロジーとの関係についての議論のレビューを行なっている。「高齢者の SNS とソーシャル・アプリケーションの利用に関する文献調査」(Coelho & Duarte 2016)では、身体的／社会的問題から社会的孤立に直面する定年退職後の高齢者たちの社会的欲求に対処するための技術の設計を目的として SNS の発展にかかわる文献を検討しており、家族の役割とプライバシー制御、ユーザインタフェース等々の 13 の領域を考慮することが、サービスの技術的な向上に資するということを主張している。また「テクノロジーの利用を通じた社会的孤立との闘いと高齢者による社会参加の向上——現存するエビデンスの体系的レビュー」(Baker et al. 2018)では、タッチスクリーン等をはじめとした ICT が高齢者の社会的孤立に与える影響について論じた 36 の文献を収集し、その一部において SNS などが論じられている。

しかしながら、こうした既存のレビューを鑑みても、孤立・孤独研究において、その SNS との関係それ自体についての議論の検討作業は、萌芽的な段階にとどまっている。Coelho & Duarte におけるレビューはその目的の限定性ゆえに文献の網羅性という観点から不備があるし、また Baker et al.によるレビューは、やはり Coelho & Duarte と同様にその対象が高齢者に限定されているほか、SNS などを扱った研究同士の差異や関係については論じていない。

こうしたことを踏まえ、本節における検討文献は Baker et al.において挙げられていた SNS と関連する文献のうち、プロシーディング 2 件 (Bloch & Bruce 2011; Bell et al. 2013) を除いた SNS にかかわる論文 10 件 (Zaphiris & Sarwar 2006; Pfeil & Zaphiris 2009; Godfrey & Johnson 2009; Burmeister 2010; Bobillier et al. 2014; Choi et al. 2014; Ballesteros et al. 2014; Czaja et al. 2015; Gao et al. 2015; Vošner et al. 2016) を中心に、タイトルなどをもとに、論文 8 本 (Pittman & Reich 2016; Meier et al. 2017; Sanders et al. 2000; Sum et al. 2008; Hampton et al. 2009; Hampton, Sessions & Her 2011; Primack, Shensa, Escobar-Viera, Barrett, Sidani, Colditz, & James 2017;

Primack, Shensa, Sidani, Whaite, ye Lin, Rosen, Colditz, Radovic, & Miller 2017; Coelho et al. 2017) を追加した。本節ではこうした作業をつうじて、既存のレビューを拡張してゆく。

4.2 結果

4.2.1 インターネットと社会的孤立／孤独の相関関係

収集された文献のうち、2000年代というもっとも初期から登場しているのは、SNSをふくむインターネットと社会的孤立の相関関係を検討するものである。以下述べていくように、かつてはインターネットの利用と社会的孤立には正の相関があると考えられてきた。だが近年では議論がより細分化され、SNSをふくむインターネットが社会的孤立・孤独をむしろ減じていく傾向や、両者のより複雑な関係が論じられてもいる。

「インターネット利用と抑鬱の関係ならびに青年たちの間の社会的孤立」(Sanders et al. 2000)では、インターネットの利用レベルが高いことと、青年間の抑鬱や社会的孤立とがどのように関係するかが論じられている。この研究では、フロリダ郊外の高校において、アンケートが実施されている。アンケートでは、インターネット利用率、母親、父親、そして友人との関係、そしてうつ病が測定され、低インターネット利用群と高インターネット利用群を比較したところ、これらの2群が、性別、民族性および社会経済的状態のような人口統計学的因子では異なることを示した。また低および高インターネット群を、関係および抑鬱尺度に関して比較した。結果として、低インターネット利用者は高利用者に比べて、母親や友人との関係が有意に良好であった。また父親との関係および抑鬱に関しては、低および高インターネット利用者の間に有意差は認められなかった(但し、両者の因果関係は特定されていない)。

これに関連して、「複数のソーシャルメディアプラットフォームの使用と抑鬱および不安の症状——米国の若年成人における全国的代表的研究」(Primack, Shensa, Escobar-Viera, Barrett, Sidani, Colditz, & James 2017)や「米国における若者のあいだのソーシャルメディア利用と認知された社会的孤立」(Primack, Shensa, Sidani, Whaite, ye Lin, Rosen, Colditz, Radovic, & Miller 2017)では、19～32歳の米国の若年成人1787人の全国代表サンプルの調査をつうじて、ソーシャルメディアサイトの利用が多い参加者の、抑鬱および不安症状や、「認知された社会的孤立」(3.1を参照)のレベルが増加している傾向を明らかにした。こうした研究は、インターネットの利用とネガティブな傾向とを結びつけている点で、Sanders et al. (2000)と近いものであるといえる。

近年ではむしろ、インターネット利用はポジティブに評価されている。「社会的孤立と新しいテクノロジー」(Hampton et al. 2009)や「コア・ネットワーク、社会的孤立、そして新しいメディア——インターネットと携帯電話利用はネットワークのサイズ及び多様性と関

係するか」(Hampton et al. 2011) では、携帯電話の所有と SNS をふくむ様々なインターネット活動への参加が、より大きく多様なコア・ディスカッション・ネットワーク (2.1 を参照) と関連しており、インターネット技術が遠隔コミュニケーションと同程度にローカルな接触のために使われていることが指摘されている。すなわちこれらの論文では、インターネットの利用が、社会的孤立を軽減する可能性が議論されているといえる。

またこれらとは別に、インターネット利用時間と孤独とは関係があるとしつつ、孤独を複数のタイプに腑分けしたうえで、それらの複雑な関係を論じる研究がある。「高齢者におけるインターネット利用と孤独」(Sum et al. 2008) は高齢者のインターネット利用と孤独の関係を調べるものであり、55 才以上、222 人が調査されている。Sum et al. の議論では、孤独が「社会的孤独」と「情緒的孤独」にわけられ、後者がさらに「家族に関する孤独」と「恋愛に関する孤独」にわけられている(社会的孤独、情緒的孤独、恋愛に関する孤独、そして家族に関する孤独については、3.1 を参照)。その上で、結果として、社会的孤独と家族に関する孤独はインターネット利用時間が長いほうが高いこと、反対に恋愛に関する孤独は利用時間が長いと孤独が減るということ、コミュニケーションツールとして使っていると社会的孤独が減るということ、知らない人とコミュニケーションをとる人は家族に関する孤独が高いということが明らかになっている。

4.2.2 SNS 利用の客観主義的分析

上記の研究は、インターネット利用と社会的孤立・孤独の相関関係を考察するものである。しかしながらこれらの研究は、そのような相関関係がどのように生じるかということについての仕組みを、必ずしも明確にはしていない。それに対して以下述べていく研究(4.2.2 と 4.2.3) は、特に SNS を対象として、両者の関係を規定する要因を、量的あるいは質的に分析しようとしている。

前者の量的研究としては、SNS 利用と社会的孤立・孤独の傾向の要因を、以下の 3 つの観点から分析している。第 1 に利用者の属性、第 2 にサービスのデザイン、第 3 にサービスの実践である。

第 1 の研究としては、世代という要因に着目するものと、ジェンダー差という要因に着目するものを見出すことができる。「ティーンエイジャーとシニアの公共オンライン・ニュースグループの利用における傾向、類似性および差異」(Zaphiris & Sarwar 2006) は、世代に注目するものである。この論文では、若い世代と高齢者の 2 つの公共オンライン・ニュースグループ(この語は定義されていないが、オンラインにおいて議論をおこなうためのフォーラムという意味で用いられている)における人間と人間の相互作用を、社会ネットワーク分析の手法によって分析している。分析をつうじて、10 代によるニュースグループの方がつ

ながりが強固であり、送受信されるメッセージが多く、相互関係が強いこと、他方で高齢者によるニュースグループには、ネットワークの残りの部分の通信を高齢者ニュースグループに依存させる傾向のある、より中心的な支配者がいることが明らかになった。「アクティブな高齢インターネットユーザのオンラインソーシャルネットワークワーキングに対する態度」(Vošner et al. 2016) は、ジェンダー差に着目している。この論文では、スロベニアにおける活動的高齢インターネットユーザによるオンラインソーシャルネットワーク (Facebook など) の利用に影響する因子を調査している。収集したデータを単変量および多変量統計的方法などで分析し、女性参加者は、男性参加者と比較して、「オンラインソーシャルネットワーク」という用語により親しみがあがり、サービスのより頻繁な使用者であることを明らかにしている。

第2に、利用者の属性でなく、サービスのデザインに着目する研究がある。これには、情報共有の容易さや、メディアのタイプに着目する研究がある。「探索と提供——オンライン情報共有が高齢者の QOL に与える影響の比較」(Choi et al. 2014) は、社会的相互作用を増加させ社会的関係形成に焦点を当てるように設計されたオンライン・コミュニティー・プラットフォームが情報共有を容易にするように設計されることの効果を論じている。この研究は、高齢者のオンライン情報共有行動と彼らの QOL への影響を明らかにするため、130 人の高齢者からの調査データを分析するものである。結果として、高齢者のオンライン情報の探索と提供は、彼らの QOL に間接的に影響し、情報の探索と提供の相対的な重要性は、高齢者の主観的な年齢、すなわち認知年齢の知覚に依存して変化することが明らかとなった。「ソーシャルメディアと孤独——なぜ Instagram の写真は Twitter の 1000 語以上の価値があるのか」(Pittman & Reich 2016) は、ソーシャルメディアにおけるコンテンツが画像中心となることの効果を論じている。本論文は、Instagram などの画像ベースプラットフォームのみが、それらが提供する強化された親密さのために孤独感を改善する可能性を有することを提案している。対照的に、Twitter などのテキストベースのプラットフォームは親密さをほとんど提供せず、孤独感に影響を与えない。こうした結果は、観察された効果が画像に基づく (テキストベースとの比較) ソーシャルメディアの使用により提供される親密さの増強によることを示唆するものである。

第3に、サービスの利用者たちが、それぞれのサービスをどのように実践するかに着目する研究がある。「高齢者の共感的オンライン・コミュニティー内のソーシャルネットワークパターンの調査」(Pfeil & Zaphiris 2009) は、高齢者のためのオンライン・コミュニティーである Senior Net 内における掲示板の社会ネットワーク構造を、社会ネットワーク分析を用いて分析している。結果として、共感的コミュニケーションに基づくソーシャルネットワークでは、非共感的コミュニケーションと比較して、メンバー同士のつながりや距離がより近い

ことなどが示された。「フェイスボク拉斯ティネーション」？——Facebook を先延ばしに使う予測因子と学生の幸福度への影響」(Meier et al. 2017) は、課題を先延ばしにするために Facebook のようなオンラインメディアに時間を費やすこと (フェイスボク拉斯ティネーション) が、特に学生の間で、ユーザの幸福を損なうことを実証している。この論文では、具体的には、先延ばし、自制心、コミュニケーションに関する最近の文献を基に、フェイスボク拉斯ティネーションの予測因子と、それが学生の学業や全体的な幸福に与える影響を調査した 2 つの研究が実施されている。どちらの研究の結果も、低い自己管理能力、習慣的な Facebook チェック、そして Facebook 利用の高い楽しみが、Facebook を先延ばしに使うことの分散のほぼ 40% を予測することを一貫して示している。さらに、後者の研究の結果は、重要な課題の不合理な遅延のために Facebook を利用することは、学生の学業ストレスレベルを高め、学業領域を超えた Facebook 利用の負の幸福感効果に寄与することを強調している。

4.2.3 SNS 利用の主観主義的分析

上記の研究がネットワーク分析などをつうじて、SNS 利用の客観的構造を分析するのに対して、以下の研究は、利用者に対するインタビューなどをつうじて、主観的な意味づけを研究しようとするものである。

「ヴァーチャル性が社会的な交流の増加をつうじた高齢者の幸福感を向上させる」(Burmeister 2010) は、ヴァーチャルな出会いが同様の利点を有することを示すものである。対象は「GrayPath」というシニア向けのサービスであり、30 名分のインタビューが、グラウンデッド・セオリーの方法で分析された。利用者たちは GrayPath を高く価値づけており、この結果は、ヴァーチャルな社会性が、高齢者の心理学のおよび社会学的研究で確認されている、特に精神的健康のために必要な社会的包括の利益を提供することを示している。「ICT は在宅介護施設 (RHCU) に住む高齢者の生活の質を改善できるか？——実際の影響から隠れた人工物まで」(Bobillier et al. 2014) は、新しい技術環境が高齢者たちの生活の質をどの程度改善できるかを探究している。この研究では、機能的能力の損失を経験し、在宅ケアユニット (RHCU) のようなマネージドケアに依存している超高齢者を検討し、17 人の住民をインタビューや観察といった質的方法を用いることによって、新しい社会的実践が形成されるかや、対象者たちがより社会的に認識されていると感じるかといったことを検討した。結果として、情報通信技術 (ICT) が相互接続性と社会的刺激において重要な役割を果たし、孤立的居住者の世界と彼らの家族の世界の間を伝達する「境界オブジェクト」として理解可能であることが示された。

4.2.4 応用可能性

その他の研究は、新たな SNS サービスの開発や発展の一部に調査研究を含むような研究である。「デジタル支援サークル——高齢者の情報ニーズへの対応」(Godfrey & Johnson 2009)では「Leeds Link-Age Plus」というサービスの開発への応用が試みられている。「成功的なエイジングを支援する ICT 仲介ソーシャルネットワーク」(Ballesteros et al. 2014)は、AGNES というプロジェクトへの応用可能性を論じている。また、「個別化リマインダー情報および社会的管理システム (PRISM) 試験——理論的根拠、方法およびベースライン特性」(Czaja, Et al. 2015)では、社会的連結性、記憶、話題に関する知識、余暇活動および資源へのアクセスを支援するために高齢者向けに設計されたソフトウェアアプリケーション、パーソナルリマインダ情報および社会管理システム (PRISM) の開発への応用が試みられている。「都市部の高齢中国人のためのモバイルソーシャルコミュニティプラットフォームのデザイン」(Gao et al. 2015)は、中国の都市部の高齢者のためのモバイルソーシャルアプリケーションへの開発の一部として行われている。「You, me & TV」——フェイスブック、テレビ、マルチモダリティとともに高齢者の社会的孤立と戦う」(Coelho et al. 2017)もまた、「You, me & TV」と名付けられたサービスへの応用を試みるものである。こうした研究は、本節の関心とは必ずしもマッチしないが、社会問題への貢献がどのように可能となるかについての示唆をもたらすものである。

4.3 考察

本節における検討をつうじて、Coelho & Duarte (2016) や Baker et al. (2018) による既存レビューは、以下のように拡張された。第 1 に、本節の検討は、Coelho & Duarte と比較したとき、検討文献の対象が高齢者以外にも拡張されることによって、より一般的なレビューとなった。第 2 に、Baker et al. に対して、孤立・孤独と SNS などの関係を対象とした研究同士がその内部において、どのような関係を備えているか、すなわち、それらがどのように展開してきたかといったことが明確となった。

他方において、本節における検討作業には、課題も残されている。第 1 に、高齢者と若者とを、腑分けして論じてはいない。Zaphiris & Sarwar (2006) をはじめとしたいくつかの研究がその対象を年齢や世代という変数において区別していることから示唆されるように、当然ながら、異なる年齢や世代では、SNS というものもつ影響や効果が異なってくる可能性がある。第 2 に、SNS はそれ自体が多様でありかつ変化が多い対象であるため、リアルタイムなフォローが困難であるということがある。こうした一連の課題を解消するためには、逐次、文献の検討をすすめる必要がある。

以上のことはまた、量的／質的な経験的研究の必要性を示唆するものである。小さな経験

的研究とそれらの系統的なレビューを併用することによって、SNS と社会的孤立・孤独との関係についての理解を深めていく必要がある。

5 おわりに

5.1 本稿の要約

本節では、ここまでの議論の簡単な要約を示し、それについての若干の考察と今後の課題を述べる。まず、1 節では、人間関係の希薄さを捉える概念として、Tunstall (1968=1978) の整理に従って、その総体を指す独存、客観的側面を捉える社会的孤立、主観的な側面を捉える孤独という 3 つの概念が導入された。そして、社会的孤立と孤独の古典的な研究を概観することを通して、独存状態にある人々の様子を捉えるためには、現在では研究領域として分化しつつある社会的孤立と孤独の双方を扱う必要があることが示唆された。

2 節では、社会的孤立について扱った研究が紹介された。そこでは、社会的孤立を測定するための尺度として、他者との接触頻度や集会等への参加頻度を尋ねる、Lubben Social Network Scale, Berkman-Syme Social Network Index, Cohen の Social Network Index が紹介され、そして、そういった尺度を用いることについての議論が取り上げられた。また、それらの尺度とは別に、コア・ディスカッション・ネットワーク（重要な事柄を相談する他者との繋がり）の存在から社会的孤立を測定する方法もあることが示された。また、社会的孤立を引き起こす要因としては、世帯構成、年齢、友人関係や集団への参加、所得などが考えられており、社会的孤立が引き起こす困難としては、心身の健康、そして、それに伴う諸問題 (e.g. 医療費の増大) が論じられていることが述べられた。

3 節では、孤独について扱った研究が取り上げられた。そこではまず、社会的孤立との異同や孤独内での分類など概念的な検討がなされ、孤独を測定する主要な尺度として、UCLA 孤独尺度、de Jong Gierveld 孤独尺度、SELSEA が紹介された。そして、孤独を引き起こす要因として、個人的な生活水準や世帯構成などの他に、文化・規範といった社会的なものの重要性、すなわち、文化・規範に適さないような生活環境であるときに孤独を感じるということが重要視されていることが論じられた。また、孤独が引き起こす困難としては、認知能力・抑鬱などへの悪影響が挙げられていることが紹介された。

4 節では、近年人間関係の構築・維持のためのツールとして注目されている、インターネットや SNS の利用と社会的孤立・孤独との関係についての研究がレビューされた。そこで取り上げられた研究によれば、そういったツールの利用がもつ社会的孤立や孤独への効果には、ポジティブなもの (Hampton et al. 2009) とネガティブなもの (Primack, Shensa, Escobar-Viera, Barrett, Sidani, Colditz, & James 2017) の両方が考えられる。併せて、調査の方法や尺度などについては、SNS のようなサービス自体が流動的なため、逐次フォローしていく必要があることもまた示された。

5.2 考察

上述したように、本稿で取り上げてきただけでも、社会的孤立と孤独に関する研究は多くの知見を蓄積してきている。ここでは、それらの研究を包括的に捉えるための理論的なフレームワークを、社会学の視点から提案することを試みていく。そこで、本稿冒頭において、独存状態が及ぼす悪影響についての研究の萌芽として取り上げた Durkheim の『自殺論』の議論に立ち戻ってみたい。というのも、彼の議論はプリミティブなものであるだけに、その後の研究によって得られた知見を包括的に理解するための手がかりになると考えられるからである。

本稿 1 節において取り上げたように、Durkheim (1897=1985) は自己本位的自殺という自殺の一類型を議論する中で、宗教の教義や世帯構成による影響で、ある人が属している社会集団の統合、つまり、密な関係に基づく成員の帰属意識が弱まると自殺をする可能性が高まると主張していた。すなわち、集団の統合／凝集性が低下することで、その集団を根拠にして生きるということができなくなり、生きる理由の喪失につながってしまうというのである。

このような彼の自己本位的自殺に関する議論の延長線上に、現代の社会的孤立研究を位置付けることができるだろう。というのも、いずれも人々が所属する集団の成員間の繋がりに関心を払っているからである。そして、現代の社会的孤立研究は、Durkheim が集団の統合や凝集性といった表現でしか捉えるしかなかったものを厳密に捉えられるように、各尺度をはじめとする測定のしかたを発達させてきたと言えるだろう。また、社会的孤立に陥った結果として、自殺率の上昇だけではなく、多様な悪影響がありうることを明らかにしてきたといえるだろう。

したがって、現在の社会的孤立研究は、理論的には Durkheim の議論と軌を一にしていると考えられる。他方で、孤独研究についても、Durkheim の議論を援用することで社会学理論の観点から捉え直していくことができると思われる。そこで目を向けるべきは、Durkheim が自殺を論じる中で提案し、後に社会学者の R. K. Merton によっても論じられたアノミーという概念である¹⁾。

Durkheim (1897=1985: 第 2 編第 5 章) は自殺の諸類型の一つとして、アノミー的自殺を挙げている。彼によれば、産業化の進展により、宗教に代表される、人々の欲望に対する道徳的な規制が後退し、欲望が規制されなくなると、際限のない欲望、つまり、満たされることのない欲望による苦悩に人々は苛まれることとなる。Durkheim は、そのような社会の無規制状態をアノミーと呼び、それが自殺の要因になっていると論じたのである。

そして、Merton のアノミー論は、そうしたアノミーという概念を Durkheim から引き継ぎながら、逸脱行動を論じる中で展開されている (Merton 1957=1961: 4 章, 5 章)。彼によ

れば、当時のアメリカ社会では、経済的に成功することが至上であるという価値観（アメリカン・ドリーム）が共有されていたにもかかわらず、それを達成するための制度的な手段が平等に与えられていなかったため、抑圧される人々が存在していた。それゆえ、そのような人々にとって、違法なふるまいが金銭的な成功をおさめるための手段となってしまったのだという。そして、Merton は、そのような文化的な価値と制度的な手段との乖離が生じている状態をアノミーと呼んだのである。

以上のように、Durkheim と Merton のアノミー論は、いずれも、社会全体で共有されている文化的価値や生の目的と、人々との関係に焦点を当てている。また、Merton は、目的だけではなく、それを達成するための制度的な手段の存在を強調している。

そして、孤独研究における論点の一つは、このようなアノミーに関する議論と重なりあっているといえるだろう。既に述べてきたように、孤独研究においては、接触頻度や生活水準だけではなく、社会・文化的な影響、すなわち、望ましいとされている人間関係を構築できていないことが孤独感を高めるという主張がなされている。そのような事態は、Merton の用語を用いるならば、望ましいとされる人間関係のあり方という目標は内面化されているにもかかわらず、それを達成するための手段がないという状況が生じ、その手段の不在が孤独感を導いていると考えることができるだろう。

このように、社会的孤立と孤独についての研究は、Durkheim の『自殺論』が切り開いた流れの中に位置づけることができると考えられる。Durkheim (1897=1985: 319-20) は、自己本位的自殺に関わる集団の統合の弱さ、そして、アノミー状態をいずれも「社会の存在が欠如している」という表現で捉えようとしている。そして、ここまでの本節での議論を踏まえるならば、Merton のいう制度的手段の不平等な配分についても、社会の欠如という大きな概念のうちに含めることはできるであろう。

ただし、彼らのアノミー論は、社会全体で共有される文化的な価値が存在し、それが個人個人の目的を定めるという前提に立っていることに注意を払う必要があるだろう。というのも、文化・価値が多様化する現代社会において、そのように特定の価値観が社会の成員全体に対して強い影響力を持っていないという可能性も考慮する必要があるからである。

そこで議論を進める際の補助線となるのが、同じく Merton によって展開された、相対的剥奪に関する議論である (Merton 1957=1961: 8 章, 9 章)。相対的剥奪は、社会学や社会心理学において広く用いられる概念であるが、その要点は、各人が準拠している集団の他の成員との比較を通して、人々が自身は相対的に劣位にあるという自己評価を下してしまうという現象を捉えることにある。ここで重要なのは、準拠集団という概念であり、Merton はその概念を導入することで、必ずしも所属集団とは一致しない、自分が身を寄せていると認識している集団 (= 準拠集団) における他者が基準となって、自己評価が決定されると論じ

ているのである。

そして、ここでいう準拠集団における他者は、内面化されうる価値・目的の設定の基準という水準では、アノミー論における社会全体の文化的価値と同様の機能を果たすものといえるだろう。つまり、準拠集団は存在しているが、そこで内面化される目的を達成するための制度的な手段がなく、劣位におかれてしまうことをアノミーと捉えることができる。

さて、ここまでの議論を整理すれば、次のように考えられるだろう。まず、Durkheimの自己本位的自殺の議論と社会的孤立は視点を共有しているといえる。そこでは、人々の所属する集団が重要であった。Durkheimの議論は、宗教団体や家族を中心にしているが、その後の研究では友人関係やクラブ活動なども考慮されるようになっていく。そして、DurkheimやMertonのアノミー論（やMertonの相対剥奪論）によるならば、ある集団において共通の価値・目的を基準として生活することは、もし、それを達成する手段がない場合には孤独状態に陥るリスクを抱えてしまうといえるだろう。

このように、Durkheimの『自殺論』を起点として考えるならば、ここでは彼が社会の欠如と呼んだ事態は、所属／準拠集団、価値・目的、そして、それと対応する制度的手段のそれぞれが人々のニーズを満たしていない状態とみなすことができるだろう。その様子を単純化して示すならば、次の表5-1のように記述することができる。ここでは所属集団＝準拠集団として、集団成員間の交流の有無、価値・目的に適合しているか否か、制度的手段の有無のそれぞれについて、2値的に表現している。そして、所属集団との交流が×となっている状態は社会的孤立と呼ばれる状態と関連しており、価値・目的や手段が×となっているところでは、孤独と呼ばれてきた状態に陥る可能性があると考えられる。

所属集団	価値・目的	手段
○	○	○
○	○	×
○	×	○
○	×	×
×	○	○
×	○	×
×	×	○
×	×	×

表 5-1 社会的孤立・孤独研究と関わる「社会の不在」

5.3 結論と今後の課題

本稿では、人間関係の希薄さと保健・医療・福祉的な諸問題の連関を捉える研究として、webサービスの利用に注目したものも含む、社会的孤立研究と孤独研究を概観してきた。

その作業を通して、本節冒頭（5.1）において要約したような知見が蓄積されていることを整理してきた。そして、それらの知見を包摂しうる理論枠組みの構築のために、Durkheim と Merton の議論を援用するという方針を示した。

今後の課題としては、まず、本節において素描した理論枠組みを精緻化していくことが考えられる。第1に、本節での議論では、表5-1のような整理するにとどまったものの、たとえば、次のような方針のもとで場合分けを詳細に行なっていくことが可能だと考えられる。表1においては、単純化のため所属集団＝準拠集団としたが、実際には両者が異なるケースが考えられる。すなわち、頻繁に交流がある所属集団の価値・目的には適合してないものの、それとは異なる集団に準拠しニーズを満たしているようなケースである。そのような類型化の作業は、これまでの知見の整理をより詳細に行うことを可能にするであろう。

第2に、表1においては、集団／価値と目的／手段を独立したものとして扱ったが、図3-1で表されたモデルのように、経験的な知見も参照しながら、それぞれのあいだの因果を含んだモデルを構築していくことが求められるだろう。

主として経験的な研究に関する課題としては、まず、各種尺度の検討が挙げられるだろう。本稿2節で指摘されているように、広く用いられている尺度に対しても批判的な議論が行われており、今後調査を設計していく上でどのような尺度を用いるかについては慎重な検討が要されるであろう。また、本稿の議論においては、社会学理論の観点から考察を行ったことで、孤独と相対的剥奪の理論的な近接性が指摘された。これを受けるならば、相対的剥奪研究における測定方法についても検討していくことが必要であろう。

ついで、本稿で注目した SNS のような web サービスの利用についての検討が挙げられるだろう。これについては、社会的孤立・孤独研究と関連づけられるような研究が端緒にいたばかりではあるものの、そのようなサービスが社会的孤立・孤独を防ぐ手立てとなる可能性が示唆されている (Hampton et al. 2009)。今後調査を進めていくためには、広く SNS などの利用を扱った経験的な研究を検討することを通して、どのような経路で社会的孤立・孤独を和らげるのかについての理論的な仮説の導出や、測定方法の検討を行っていかねばならないであろう。

[注]

1) アノミーは、Tunstall (1968=1978) も社会的孤立や孤独に関わる概念として用いているため、ここでアノミーの検討を行うことは妥当であろう。河合 (2009: 25-6) や本稿2節も参照。

[付記]

本稿は、『一億総活躍社会』実現に向けた総合的研究』の成果物である。本稿を執筆するにあたって、ディスカッションペーパーのコメンテータを務めていただいた、日本福祉大学の斉藤雅茂准教授、東京都健康長寿医療センター研究所の桜井良太主任研究員をはじめとする研究会出席者の方々から貴重なコメントをいただいた。ここに感謝の意を表す。

[文献]

- Baker, S., J. Warburton, J. Waycott, F. Batchelor, T. Hoang, B. Dow, E. Ozanne, & F. Vetere, 2018, "Combating Social Isolation and Increasing Social Participation of Older Adults through the Use of Technology: A Systematic Review of Existing Evidence," *Australasian Journal on Ageing*, 37 (3): 184-93.
- Ballesteros, S., P. Toril, J. Mayas, J.M. Reales, & J.A. Waterworth, 2014, "An ICT-Mediated Social Network in Support of Successful Ageing," *Gerontechnology*, 13 (1): 37-46.
- Bell, C., C. Fausset, S. Farmer, J. Nguyen, L. Harley, & W. B. Fain, 2013, "Examining Social Media Use among Older Adults." Proceedings of the 24th ACM Conference on Hypertext and Social Media, 158-163.
- Bloch, N. & B. Bruce, 2011, "Older Adults and the New Public Sphere." iConference 2011, Inspiration, Integrity, and Intrepidity.
- Bobillier Chaumon, M-E., C. Michel, F. Tarpin Bernard, & B. Croisile. 2014. "Can ICT Improve the Quality of Life of Elderly Adults Living in Residential Home Care Units? From Actual Impacts to Hidden Artefacts," *Behaviour & Information Technology*, 33 (6): 574-90.
- Boden-Albala, B., Litwak, E., Elkind, M. S. V., Rundek, T. & Sacco, R. L., 2005, "Social isolation and outcomes post stroke," *Neurology*, 64(11): 1888-1892.
- Burmeister, O. K., 2010, "Virtuality Improves the Well Being of Seniors through Increasing Social Interaction," J. Berleur, M. D. Hercheui & L. M. Hilty, eds., *What Kind of Information Society?: Governance, Virtuality, Surveillance, Sustainability, Resilience*, Springer Berlin Heidelberg, 131-141.
- Cacioppo, J. T. & Cacioppo, S., 2014, "Social relationships and health: The toxic effects of perceived social isolation," *Social and personality psychology compass*, 8(2): 58-72.
- Cacioppo, J. T., J. M. Ernst, M. H. Burleson, M. K. McClintock, W. B. Malarkey, L. C. Hawkey, R. B. Kowalewski, et al., 2000, "Lonely Traits and Concomitant

- Physiological Processes: The MacArthur Social Neuroscience Studies,” *International Journal of Psychophysiology* 35 (2–3): 143–54.
- Cacioppo, J. T., J. H. Fowler & N. A. Christakis, 2009, “Alone in the Crowd: The Structure and Spread of Loneliness in a Large Social Network,” *Journal of Personality and Social Psychology* 97 (6): 977–91.
- Cacioppo, J. T. & L. C. Hawkley, 2009, “Perceived Social Isolation and Cognition,” *Trends in Cognitive Sciences* 13 (10): 447–54.
- Cacioppo, J. T., L. C. Hawkley, G. J. Norman & G. G. Berntson, 2011, “Social Isolation,” *Annals of the New York Academy of Sciences* 1231 (1): 17–22.
- Cacioppo, J. T., L. C. Hawkley & R. A. Thisted, 2010, “Perceived Social Isolation Makes Me Sad: 5-Year Cross-Lagged Analyses of Loneliness and Depressive Symptomatology in the Chicago Health, Aging, and Social Relations Study,” *Psychology and Aging* 25 (2): 453–63.
- Cacioppo, J. T., C. J. Norris, J. Decety, G. Monteleone & H. Nusbaum, 2009, “In the Eye of the Beholder: Individual Differences in Perceived Social Isolation Predict Regional Brain Activation to Social Stimuli,” *Journal of Cognitive Neuroscience* 21 (1): 83–92. 11.
- Cattan, M., White, M., Bond, J., & Learmouth, A, 2005, “Preventing Social Isolation and Loneliness among Older People: A Systematic Review of Health Promotion Interventions,” *Ageing & Society*: 25(1): 41-67.
- Choi, J. H., S. Kim, J. Y. Moon, J. Kang, I. Lee & J. Kim, 2014, “Seek or Provide: Comparative Effects of Online Information Sharing on Seniors’ Quality of Life,” *Communications of the Association for Information Systems*, 34: 513–30.
- Coelho, J. & C. Duarte, 2016, “A Literature Survey on Older Adults’ Use of Social Network Services and Social Applications,” *Computers in Human Behavior*, 58: 187–205.
- Coelho, J., F. Rito & C. Duarte, 2017, “‘You, Me & TV’: Fighting Social Isolation of Older Adults with Facebook, TV and Multimodality,” *International Journal of Human-Computer Studies*, 98: 38–50.
- Cohen S., 1991, “Social supports and physical health,” Greene, A.L., Cummings M. & Karraker K.H. eds. *Life-Span Developmental Psychology: Perspectives on Stress and Coping*. Hillsdale, NJ: Erlbaum Associates; 676-684.
- Cudjoe, T. K. M., D. L. Roth, S. L. Szanton, J. L. Wolff, C. M. Boyd & R. J. Thorpe, 2020, “The Epidemiology of Social Isolation: National Health and Aging Trends Study,” *The Journals of Gerontology. Series B, Psychological Sciences and Social Sciences* 75 (1): 107–13.

- Czaja, S. J., W. R. Boot, N. Charness, W. A. Rogers, J. Sharit, A. D. Fisk, C. C. Lee & S. N. Nair, 2015, "The Personalized Reminder Information and Social Management System (PRISM) Trial: Rationale, Methods and Baseline Characteristics," *Contemporary Clinical Trials*, 40: 35–46.
- Ford, ES, Loucks, EB & Berkman LF., 2006, "Social integration and concentrations of C-reactive protein among US adults," *Annals of epidemiology*, 16:78–84.
- De Jong Gierveld, J. & C. Tesch-Römer, 2012, "Loneliness in Old Age in Eastern and Western European Societies: Theoretical Perspectives," *European Journal of Ageing* 9 (4): 285–95.
- De Jong Gierveld, J. & T. van Tilburg, 2006, "A 6-Item Scale for Overall, Emotional, and Social Loneliness: Confirmatory Tests on Survey Data," *Research on Aging* 28 (5): 582–98.
- De Jong Gierveld, J. & T. van Tilburg, 1999, *Manual of the Loneliness Scale*. Amsterdam: Department of Social Research Methodology, Vrije Universiteit.
- De Jong Gierveld, J., T. G. van Tilburg & P. A. Dykstra, 2018, "New Ways of Theorizing and Conducting in the Field of Loneliness and Social Isolation," In *The Cambridge Handbook of Personal Relationships*, edited by A. Vangelisti & D. Perlman, 2nd ed., 391–404. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Jong Gierveld, J. & F. Kamphuis, 1985, "The Development of a Rasch-Type Loneliness Scale." *Applied Psychological Measurement* 9 (3): 289–99.
- DiTommaso, E., C. Brannen & L. A. Best, 2004, "Measurement and Validity Characteristics of the Short Version of the Social and Emotional Loneliness Scale for Adults," *Educational and Psychological Measurement* 64 (1): 99–119.
- DiTommaso, E. & B. Spinner, 1993, "The Development and Initial Validation of the Social and Emotional Loneliness Scale for Adults (SELSA)," *Personality and Individual Differences* 14 (1): 127–34.
- Durkheim, É., 1897, *Le suicide: Étude de sociologie*, Paris, PUF. (宮島喬訳, 1985, 『自殺論』中央公論新社。)
- Gable, S. L., 2006, "Approach and Avoidance Social Motives and Goals," *Journal of Personality* 74 (1): 175–220.
- Gao, Q., D. Ebert, X. Chen & Y. Ding, 2012, "Design of a Mobile Social Community Platform for Older Chinese People in Urban Areas," *Human Factors and Ergonomics in Manufacturing & Service Industries*, 25(1): 66–89.
- Godfrey, M. & O. Johnson, 2009, "Digital Circles of Support: Meeting the Information Needs of Older People." *Computers in Human Behavior*, 25 (3): 633–42.

- Giuli C., Spazzafumo L., Sirolla C., Abbatecola A.M., Lattanzio F. & Postacchini D., 2012, “Social isolation risk factors in older hospitalized individuals,” *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 55 (3): 580–585.
- Hampton, K. N., L. F. Sessions, E. J. Her & L. Rainie, 2009, *How the Internet and Mobile Phones Impact Americans’ Social Networks*, Princeton Survey Research Associates International.
- Hampton, K. N., L. F. Sessions & E. J. Her, 2011, “Core Networks, Social Isolation, and New Media: How Internet and Mobile Phone Use Is Related to Network Size and Diversity,” *Information, Communication & Society*, 14 (1): 130–55.
- Hawkey, L. C., R. A. Thisted & J. T. Cacioppo, 2009, “Loneliness Predicts Reduced Physical Activity: Cross-Sectional & Longitudinal Analyses,” *Health Psychology* 28 (3): 354–63.
- Holt-Lunstad, J., T. B. Smith, M. Baker, T. Harris, & D. Stephenson, 2015, “Loneliness and Social Isolation as Risk Factors for Mortality: A Meta-Analytic Review,” *Perspectives on Psychological Science* 10 (2): 227–37.
- Iliffe, S., Kharicha, K., Harari, D., Swift, C., Gillmann, G. & Stuck, A. E. , 2007, “Health risk appraisal in older people 2: The implications for clinicians and commissioners of social isolation risk in older people,” *British Journal of General Practice*, 57: 277–282.
- 河合克義, 2009, 『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社.
- 河合克義, 2013, 「社会的孤立問題とは何か」河合克義・菅野道生・板倉香子編『社会的孤立問題への挑戦——分析の視座と福祉実践』: 3-22.
- Knox, S. S. & K. Uvnäs-Moberg, 1998, “Social Isolation and Cardiovascular Disease: An Atherosclerotic Pathway?” *Psychoneuroendocrinology* 23 (8): 877–90.
- Kohn, M. L. & Clausen, J. A., 1955, “Social isolation and schizophrenia,” *American Sociological Review*, 20(3): 265-273.
- 栗本鮎美・栗田主一・大久保孝義・坪田（宇津木）恵・浅山敬・高橋香子・末永カツ子・佐藤洋・今井潤, 2011, 「日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版（LSNS-6）の作成と信頼性および妥当性の検討」『日本老年医学会雑誌』48（2）: 149-157.
- Lowenthal M. F., 1964, “Social Isolation and mental illness in old age,” *American Sociological Review*, 29(1): 54-70.
- Lubben, J., Girona, M. & Lee, A., 2002, “Refinements to the Lubben Social Network Scale: The LSNS-R,” *Behavior Measurement Letter*, 7 (2): 2-11.
- Lubben J, Blozik E, Gillman G, Iliffe S, von Renteln Kruse W, Beck JC & Stuck AE., 2006, “Performance of an abbreviated version of the Lubben Social Network Scale among three European community-dwelling older adult populations,” *Gerontologist*, 46: 503–513

- 前島直樹, 2019, 「つながりに効く, ネットワーク研究小話 vol.11 幻の社会的孤立化をめぐる」 Sansan Builders Box ホームページ, (2020年3月12日取得, <https://buildersbox.corp-sansan.com/entry/2019/09/10/110000>) .
- Marsden, P., 1987, "Core Discussion Networks of Americans." *American Sociological Review*, 52:122-31.
- 舩田ゆづり・田高悦子・臺有桂, 2012, 「高齢者における日本語版 UCLA 孤独感尺度 (第3版) の開発とその信頼性・妥当性の検討」 『日本地域看護学会誌』 15 (1): 25-32.
- McPherson, M., & Smith-Lovin, L., 2006, "Social isolation in America: Changes in core discussion networks over two decades," *American Sociological Review*, 71(3): 353-375.
- Meier, A., L. Reinecke & C. E. Meltzer, 2016, "“Facebocrastination”? Predictors of Using Facebook for Procrastination and Its Effects on Students’ Well-Being,” *Computers in Human Behavior*, 64: 65-76.
- Merton, R. K., 1957, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, New York: The Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, 1961, 『社会理論と社会構造』 みすず書房.)
- 内閣府, 2017, 『平成 29 年版 子供・若者白書 特集 若者にとっての人とのつながり』.
- Nancy E. G. & Verena H., 2019, "A comparison of different definitions of social isolation using Canadian Longitudinal Study on Aging (CLSA) data," *Ageing & Society*: 1-24.
- NHK, 2010, 『NHK スペシャル 無縁社会～”無縁死”3万2千人の衝撃～』 (https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009010577_00000, 予告編のみ閲覧可).
- Perlman, D. & L. A. Peplau, 1984, "Loneliness Research: A Survey of Empirical Findings," In *Preventing the Harmful Consequences of Severe and Persistent Loneliness*, edited by L. A. Peplau & S. E. Goldston, Rockville, MD, US. 13-46.
- Pfeil, U. & P. Zaphiris, 2009, "Investigating Social Network Patterns within an Empathic Online Community for Older People," *Computers in Human Behavior*, 25 (5): 1139-55.
- Pittman, M., & B. Reich, 2016, "Social Media and Loneliness: Why an Instagram Picture May Be Worth More than a Thousand Twitter Words," *Computers in Human Behavior*, 62: 155-67.
- Primack, B. A., A. Shensa, C. G. Escobar-Viera, E. L. Barrett, J. E. Sidani, J. B. Colditz & A. E. James, 2017, "Use of Multiple Social Media Platforms and Symptoms of Depression and Anxiety: A Nationally-Representative Study among U.S. Young Adults," *Computers in Human Behavior*, 69: 1-9.

- Primack, B. A., A. Shensa, J. E. Sidani, E. O. Whaitte, L. yi Lin, D. Rosen, J. B. Colditz, A. Radovic & E. Miller, 2017, "Social Media Use and Perceived Social Isolation among Young Adults in the U.S." *American Journal of Preventive Medicine*, 53 (1): 1–8.
- Russell, D., L. A. Peplau & C. E. Cutrona, 1980, "The Revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and Discriminant Validity Evidence," *Journal of Personality and Social Psychology* 39 (3): 472–80.
- Russell, D., C. E. Cutrona, J. Rose & K. Yurko, 1984, "Social and Emotional Loneliness: An Examination of Weiss's Typology of Loneliness," *Journal of Personality and Social Psychology* 46 (6): 1313–21.
- Russell, D., L. A. Peplau & M. L. Ferguson, 1978, "Developing a Measure of Loneliness," *Journal of Personality Assessment* 42 (3): 290–94.
- Russell, D. W., 1996, "UCLA Loneliness Scale (Version 3): Reliability, Validity, and Factor Structure," *Journal of Personality Assessment* 66 (1): 20–40.
- 齊藤雅茂, 2012, 「高齢者の社会的孤立に関する主要な知見と今後の課題」, 『季刊家計経済研究』 94 : 55-61.
- 齊藤雅茂, 2018, 『高齢者の社会的孤立と地域福祉——計量的アプローチによる測定・評価・予防策』 明石書店.
- Sanders, C. E., T. M. Field, M. Diego & M. Kaplan, 2000, "The Relationship of Internet Use to Depression and Social Isolation among Adolescents," *Adolescence*, 35 (138): 237–42.
- Scaccianoce, S., P. D. Bianco, G. Paolone, D. Caprioli, A. M. E. Modafferi, P. Nencini & A. Badiani, 2006, "Social Isolation Selectively Reduces Hippocampal Brain-Derived Neurotrophic Factor without Altering Plasma Corticosterone," *Behavioural Brain Research* 168 (2): 323–25.
- Schinka, K. C., M. H. M. Vandulmen, R. Bossarte & M. Swahn, 2012, "Association between Loneliness and Suicidality during Middle Childhood and Adolescence: Longitudinal Effects and the Role of Demographic Characteristics," *Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied* 146 (1–2): 105–18.
- Shankar A., McMunn A., Banks J. & Steptoe A., 2011, "Loneliness, social isolation, and behavioral and biological health indicators in older adults," *Health Psychology*, 30 (4): 377–385.
- Shankar A., Hamer M., McMunn A. & Steptoe A., 2013, "Social isolation and loneliness: relationships with cognitive function during 4 years of follow-up in the English Longitudinal Study of Ageing," *Psychosomatic Medicine*, 75 (2): 161–170.

- Stephens, A., A. Shankar, P. Demakakos & J. Wardle. 2013. "Social Isolation, Loneliness, and All-Cause Mortality in Older Men and Women," *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 110 (15): 5797–5801.
- Stranahan, A. M., D. Khalil & E. Gould, 2006, "Social Isolation Delays the Positive Effects of Running on Adult Neurogenesis," *Nature Neuroscience* 9 (4): 526–33.
- Sum, S., R. Mark Mathews, I. Hughes & A. Campbell, 2008, "Internet Use and Loneliness in Older Adults," *Cyber Psychology & Behavior*, 11 (2): 208–11.
- 橋本俊詔, 2011, 『無縁社会の正体：血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』 PHP.
- Tanskanen, J. & T. Anttila, 2016, "A Prospective Study of Social Isolation, Loneliness, and Mortality in Finland," *American Journal of Public Health* 106 (11): 2042–48.
- Thoits, P. A., 1983, "Multiple Identities and Psychological Well-Being: A Reformulation and Test of the Social Isolation Hypothesis," *American Sociological Review* 48 (2): 174–87.
- Tigges, L. M., Browne, I. & Green, G. P., 1998, "Social isolation of the urban poor: Race, class, and neighborhood effects on social resources," *Sociological Quarterly*, 39(1), 53-77.
- Tomaka, J., Thompson, S., & Palacios, R., 2006, "The relation of social isolation, loneliness, and social support to disease outcomes among the elderly," *Journal of aging and health*, 18(3): 359-384.
- Townsend, P., 1957, *The Family Life of Old People: An Inquiry in East London*, London, Routledge & Kagen Paul.
- Townsend, P., 1963, *The Family Life of Old People: An Inquiry in East London*, Abridged Edition, London, Pelican Books (山室周平訳, 1974, 『居宅老人の生活と親族網：戦後東ロンドンにおける実証的研究』 垣内出版.)
- Tunstall, J., 1966, *Old and Alone: A Sociological Study of Old People*, London, Routledge & Kagen Paul. (光信隆夫訳, 1978, 『老いと孤独：老年者の社会学的研究』 垣内出版.)
- Vošner, H. B., S. Bobek, P. Kokol & M. J. Krečič, 2016, "Attitudes of Active Older Internet Users towards Online Social Networking," *Computers in Human Behavior*, 55: 230–41.
- Weiss, R S., 1974, *Loneliness: The Experience of Emotional and Social Isolation*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Wenger, G. C. & Burholt, V., 2004, "Changes in levels of social isolation and loneliness among older people in a rural area: A twenty-year longitudinal study," *Canadian Journal on Aging/la revue canadienne du vieillissement*, 23(2): 115-127. 74.
- Wenger, G. C., Davies, R., Shahtahmasebi, S., & Scott, A., 1996, "Social Isolation and Loneliness in Old Age: Review and Model Refinement," *Ageing & Society*, 16(3): 333-358.

- Yamada, M. & J. Decety, 2009, "Unconscious Affective Processing and Empathy: An Investigation of Subliminal Priming on the Detection of Painful Facial Expressions," *Pain* 143 (1–2): 71–75.
- Zaphiris, P. & R. Sarwar, 2006, "Trends, Similarities, and Differences in the Usage of Teen and Senior Public Online Newsgroups," *ACM Transactions on Computer-Human Interaction (TOCHI)*, 13 (3): 403–22.